

Roland Barthes : *Le Degré zéro de l'écriture*

— 日本語翻訳と文体の相対化 —

中川 正弘

0 はじめに

昨年取り上げた「*L'utopie du langage* (言語のユートピア)」はこのエッセー集の終わりに置かれた章だ。筆者が最初の三つ、「*Introduction* (序)」、「*Qu'est-ce que l'écriture?* (エクリチュールとは何か)」、「*Écritures politiques* (政治のエクリチュール)」を飛ばし、まず「*L'écriture du Roman* (小説のエクリチュール)」から始めたのは、そこからはバルトの歴史観、文学史観と言えものが感じられるほど具体的に作家の例を挙げていたからだ。しかし、最後の章になると、サルトルへの言及がいくらかあるぐらいで、議論はひじょうに抽象的だ。

今回取り上げる「*Écritures politiques* (政治のエクリチュール【仮訳】)」の章に「*politique*」という言葉は10回、「*Triomphe et rupture de l'écriture bourgeoise* (ブルジョア・エクリチュールの勝利と破綻)」に3回、計13回だけだが、この言葉が出てこないどの章でも、マルキストであるバルトの思考の根底にあるのはやはり「政治 (*politique*)」という言葉で表されるものようだ。

エクリチュールと「政治」の関わりを論じているこの章の冒頭では、念を押すかのように「*écriture* (エクリチュール)」を「*langage parlé* (話される言語／話された言語)」と対比しているのだが、それに続く議論を追っていくと、「話される言語」とは「日常使われる自然な言語」を指すだけで、例として取り上げられる「フランス革命時のエクリチュール」「スターリンのエクリチュール」は、日常使われる自然な言語とは違う、「定型化した言語の使い方」でしかない。いくら後に書き写されたとしても、これらは厳密には「書かれる言語／書かれた言語」ではなく、「話された言語」と言えなくもない。

最初に取り上げた「小説のエクリチュール」の章は間違いなく文学の「書かれた言語」の具体的な例ばかりであり、バルトの思考を確認するには最適だったのだが、その直前に置かれたこの章は、まだ目標地点がハッキリしないゼロ地点と感じられる。

当時の世界の政治においてもっとも存在感のあるスターリン (Joseph Staline) はこの章で5回言及されるが、そのスターリンはこのエッセー集が公刊された1953年

の3月5日に亡くなっている。晩年のスターリンに向けられたバルトの視線はそれだけリアルに感じられる。

今回も検討の対象とする日本語訳は以下の四つである。

『零度の文学』 森本和夫訳、現代思潮社、1965年

『零度のエクリチュール』 渡辺淳・沢村昂一訳、みすず書房、1971年

『エクリチュールの零度』 森本和夫・林好雄訳、ちくま学芸文庫、1999年

『零度のエクリチュール』 石川美子訳、みすず書房、2008年

1 « Écritures politiques » はこう訳された

(Barthes) *Écritures politiques*

(森本1) 政治的な文章

(渡辺) 政治的エクリチュール

(森本2) 政治的なエクリチュール

(石川) 政治的なエクリチュール

(中川) 政治的に使われるエクリチュール

日本語では、形容詞はただ「性質・状態・属性」を表すと考えられるが、フランス語は日本語と事情がすこし違う。構文に合わせてさまざまにパラフレーズし、品詞の変換をよく行うため、品詞が意味の本質を表すわけではなく、制御しなければならない「機能」となっている。

フランス語形容詞 « *politique* » は単語として直訳すれば、「政治的(な)」としかできないが、これでは日本語で特殊な「性質・状態・属性」としか理解できない。この章で取り上げられる「誇張(*emphatique/enflure/inflation/emphase/amplification*)」「トートロジー(*tautologie*)」はそれ自体で「政治的」という質を有しているわけではなく、そのような使い方がされるだけ、つまり「政治に関わる／政治で使われる／政治的に使われる」としか言えない。ここではそのような意味をごく簡明に表す「政治の」でもいいが、「政治的に使われる」とハッキリさせてもいいだろう。「政治に関わる」は辞書でこの形容詞の訳語として挙げられているが、日本語をフランス語に翻訳する場合、動詞を使ったさまざまなフレーズが形容詞 « *politique* » 一語になる。

文の主動詞以外に、さまざまな部分で動詞を使う日本語をフランス語に翻訳する場合、主要ではない動詞はそのような意味合いで使う名詞や前置詞、副詞とすることで論理的な構文ができる。

Toutes les **écritures** présentent un caractère de **clôture** qui est étranger au **langage parlé**.

あらゆる文章は、語られる言語とは異なった垣根の性格をあらわしている。

すべてのエクリチュールが口語には無縁な囲いの性格を示している。

あらゆるエクリチュールは、語られる言語(ラング・ジュ・パール)とは異質の閉域の性格を示している。

あらゆるエクリチュールは、話し言葉には見られない閉鎖的な性格をもっている。

どんなエクリチュールも話される言葉には縁のない、閉じ籠もる性質を見せている。

« **écriture** » の対立項に « **parole** » ではなく、そのパラフレーズである « **langage parlé** » を用いている。これは交叉的に « **écriture** » が « **langage écrit** » と言い換え可能であることを示している。

écriture エクリチュール ----- parole パロール

langage écrit 書かれる言語 ----- langage parlé 話される言語

「reciter/raconter/narrer : 語る」は日常的な「parler : 話す」と区別しなければならない。「語られる言語」と訳せば、現実の人間社会ではない、小説などの作品世界のほうに、またその中でも、作中人物同士が相手に向けて話す言葉(parole)でもなく、作品のフレームとなる「語り(narration)」と受け取られるだろう。

「口語」は「文語」と、「話し言葉」は「書き言葉」と対立するものであり、「話される言葉」とは違う。これは「生活で使われている単語、フレーズ」というカテゴリーしか示さない。

« **clôture** » を名詞のまま訳そうとすると、辞書に「垣根／囲い／閉域」とあるように、日本語では具体的で特殊な言葉が出やすい。石川訳は「閉鎖的な性格」と形容詞化したことで抽象度が上がっているが、「**caractère** (性格)」と組み合わせたことで擬人化され、無用に「人間的」と感じられる。このフランス語自体は動詞「囲う／閉じる」を名詞化したものだし、ここで使われた品詞構成は可能なパラフレーズの一つというだけで、必然性があるわけでもないのだから、日本語では動詞に言い換えたほうが意味のノイズとなる特殊化が起きにくい。

L'écriture n'est nullement un instrument de **communication**, elle n'est pas une voie ouverte par où passerait seulement une **intention** de langage.

文章は、なんら伝達の道具ではない。すなわち、単に言語の意図が通って行く聞かれた道ではないのだ。

エクリチュールはけっして伝達の道具でもなければ、ただ言語の意図が通っていく開かれた通路でもない。

エクリチュールは、伝達の道具ではまったくない。すなわち、単に言語(ランゲージュ)の意図が通って行く開かれた道ではないのだ。

エクリチュールはけっして伝達の道具ではない。言葉をつたえようとする意図のみが通過してゆくような開かれた道ではない。

エクリチュールは考えを伝える道具などではけっしてない。言葉の内容がただ通過するだけのオープンな道ではないのだ。

名詞 « communication (伝達) » は動詞 « communiquer (伝達する) » を使って言い換えることができる。基本的に動詞を多用したほうが日本語らしくなるのだが、漢語「伝達」は和語の動詞「伝える」と比べると、「公式➡抽象度が高い➡特殊ではなく一般的」となりそうだが、「先生が学生に予定を伝達した」とは使っても、「学生が先生にこれから何をするか伝達した」とは使わない。日本語では「一般性」が抽象度の論理的上位にならず、「特殊な例」、「具体例」の一つとして横並びになることが多い。

バルトは « pensée (考え) »、« intention (意図) » という語で「言葉の意味・内容」を指す。こうすることで記号 « signe » の内部構造である « signifiant/signifié (能記/所記) » の « signifié » とは差異化でき、言葉の表層構造とは別に曖昧にはあっても、「深い意味/遠い意味」が記号解釈の対象となる「意味・内容」として定位される。

C'est tout un désordre qui s'écoule à travers la parole, et lui donne ce mouvement dévoré qui le maintient en état d'éternel sursis.

語りを貫いて流れ、それに、駆り立てられたような動きを与えるのは、ひとつの無秩序の全体であって、その動きがその無秩序を永遠の執行猶予の状態に保つ。

コトバを通じて流れるのはひとつの無秩序の全体であり、それがコトバに、その無秩序を永遠の執行猶予の状態に保つ、あの駆りたてられたような動きを与えている。

語り(パロール)を貫いて流れ、それに駆り立てられたような動きを与えるのは、ひとつの無秩序の全体であって、その動きがその無秩序を永続的な執行猶予の状態に保つ。

話し言葉では、そこから流れ出てくるのは無秩序そのものであり、その無秩序があの手で喰られてゆく動きを言葉にあたえて、またその動きが無秩序を永遠の執行猶予状態にとどめている。

話される言葉を通して流れるのはまったく秩序のない内容だ。そのせいで言葉にはあのむさぼられつつあるような動きが出るのだが、その動きはその無秩序な内容をいつまでも執行待ちの状態にとどめる。

二つ前の文について述べたが、「parole」と「langage parlé」は言い換えに過ぎない。これらを訳し分けようとするると混乱が生じる。石川訳のみ二つの訳語を同じにしているのだが、「話し言葉」は「書き言葉」と対立するものと捉えられ、「語・文(mot/phrase)」のレベルのスタイルのカテゴリーになる。日本語では漢字と仮名を使

い分け、語彙レベルで区別するものが多いが、原則「言文一致」のフランス語には、「書き言葉」のようなものが基本的に存在しないため、内容がかなり歪んでしまう。

« sursis » は辞書の訳語のトップに出る「執行猶予」と訳して済みますことが多い。これは論理的には意味の一般性が高い、公式の法律用語なのだが、その現実の用例が「犯罪の刑罰」に特化しているため、そのような色が着いてしまう。「執行待ち(の状態)」とすれば、それが避けられる。

A l'inverse, l'écriture est un langage **durci** qui vit sur lui-même et n'a nullement la charge de confier à sa propre **durée** une suite mobile d'**approximations**, mais au contraire d'imposer, par l'unité et l'**ombre** de ses signes, l'image d'une parole construite bien avant d'être inventée.

それとは逆に、文章は、自分自身に依拠して生きる凝固した言語であって、動きやすい一連の近似物をおのれ自身の持続に託する任務をなんら持たず、反対に、その諸標章の統一性や影によって、創出されるより遙か以前に構築される語りのイメージを浮き出させる任務を持っているのだ。

それとは逆にエクリチュールは自分自身を糧として生きる凝固した言語であって、自らの持続に、一連の近似物の動きを委ねる任務を全然もたないどころか、その任務はつくり出されるまさしく以前に構築されたコトバのイメージを、自らの記号の単一性と影とによって刻印することにほかならない。

それとは逆に、エクリチュールは、自分自身に依拠して生きる凝固した言語であって、なんら、おのれ自身の持続に近似物の可動的な連続体を託する任務を持たず、その反対に、その諸標章(シニユ)の一体性や陰影によって、創出されるよりも遙か以前に構築された語りの像を罷り通らせる任務を持っているのである。

それとは逆にエクリチュールのほうは、自分自身で充足して生きる硬質の言語活動である。話し言葉という近似物のもつ変化にとんだ連続をみずからの持続にゆだねる義務などまったくなく、それどころか、自分の記号の一体性と陰影とによって、エクリチュールが創られるよりもはるか以前に作られた話し言葉のイメージをおしつけるという任務をもっている。

それとはまったく違い、エクリチュールは凝固しているが、他に依拠せず、それ自体で生きている言語だ。話される言語はだんだん近づいて行く途中の、いくつもの生成の段階をそれ自体の時間に重ねなければならないのだが、エクリチュールはそんなことをまったくしないどころか、自身を構成する記号群の一体性と、浮き彫りのように見えることを利用し、実際に創られたよりもはるか以前に作られた言葉だと思込ませなければならない。

過去分詞 « **durci** » を三つの訳は「凝固した言語」と動詞として訳し、「柔らかい物が固くなる変化」を表しているのに対し、石川訳は「硬質の(=硬い)」と形容詞的に訳したことで「固いため変化しない➡無変化/単一」しか意味しなくなっている。しかし、バルトは « **écriture** » を、歴史の中で「閉じる(**clôture**<**clore**)➡固まる」という生成のイメージで、また他にも同種のものが存在すると見なしている。「無変化/単一」の意味合いは含めない方がいい。

« confier à sa propre durée une suite mobile d'approximations » が「動きやすい一連の近似物をおのれ自身の持続に託する／自らの持続に、一連の近似物の動きを委ねる／おのれ自身の持続に近似物の可動的な連続体を託する／話し言葉という近似物のもつ変化にとんだ連続をみずからの持続にゆだねる」と訳されている。このようにどういう意味か理解しがたくなかったのは「数学の折れ線グラフ」を想起させる「approximations」が使われたせいだろう。これが何を指すか示さなくては理解できないと判断したようで、石川訳は「話し言葉という」を書き足している。

« durci (凝固する) » ➡ 変化、また « imposer … l'image d'une parole construite bien avant d'être inventée (エクリチュールは、生み出されるずっと前にできあがっている言葉だという、実態とは違うフェイクのイメージを押しつける) » から、ここではエクリチュールの「生成過程」について説明していると理解できる。

バルトはこれを折れ線グラフと見立てており、「approximations」は「完成形」に至る途中にある複数の「近似値点＝近似物」が描く漸近線としか考えられない。

« par l'unité et l'ombre de ses signes » の « ombre (影) » は « ses signes (エクリチュールを構成する記号群) » が凝固し、動かなくなった場合、その代償として生じる「陰影という視覚効果」を意味するのだろう。動かず立体的に見えるものは「儚く移ろいやすいもの」ではなく、「永遠に続くもの ➡ 昔からあったもの」と錯覚させやすい。

Ce qui oppose l'écriture à la parole, c'est que la première *paraît* toujours **symbolique**, introversée, tournée ostensiblement du côté d'un versant secret du langage, tandis que la seconde n'est qu'une **durée** de signes vides dont le mouvement seul est significatif.

このことは文章を語りに対立させる。それは、前者が常に象徴的で、内向的で、公然と言語の秘密の斜面へ向きを変えているように見えるのに対して、後者は、その動きのみが意味をもつところの、空っぽの標章の持続だからである。

エクリチュールをコトバに対立させているのは、前者がつねに象徴的、内向的で、言語の秘密の斜面の方にはっきりと向いているように見えるのに反して、後者は動きだけが意味のある、空ろな記号の持続にすぎないという点だ。

エクリチュールを語りに対置するのは、前者が常に象徴的で内向的で言語の秘められた斜面の側に公然と向き直っているように見えるのに対して、後者は、その動きだけが表意的である空虚な標章(シニユ)の持続にほかならないからなのだ。

エクリチュールと話し言葉が対照的なのは、エクリチュールがつねに象徴的前屈内向的で、言葉の秘められた側面のほうへ公然と向いているように見えるのに対して、話し言葉のほうは動きだけが重要な意味をもつ空疎な記号の持続にすぎないということである。

エクリチュールと話される言葉が違うのは、エクリチュールが、つねに何かを象徴しているかのよう、内向きで、言葉の隠れた面にこれ見よがしに向いているのに対し、話される言葉の

ほうはその動きしか意味を持たない空虚な記号の連なっていく時間にすぎないところだ。

ここに使われた形容詞 « symbolique » は品詞を変換し、名詞 « symbole »、動詞 « symboliser » を使っても同じ内容を示せるが、日本語では「象徴的(形容詞)」と「象徴(名詞)」「象徴する(動詞)」を品詞の違いによって特殊に使い分けようとしやすい。日本語では純粹にこの機能を示す動詞にすれば、余計な色につかない。

« une durée de signes vides » が「空っぽの標章の持続／空疎な記号の持続／空虚な標章(シニユ)の持続／空疎な記号の持続」と訳されている。「durée」は動詞 « durer(持続する) » の派生名詞だが、そのままの意味で使われるだけでなく、「断面➡瞬間」と捉えられやすい「時間」のもう一つの長く続く側面を指して使われる。しかし、ここでただ「持続」とすると、日本語では「標章／記号」が「たくさん連なる」というイメージではなく、「持続する➡交替・変化しない➡単一」というイメージになってしまう。「話される言葉」を構成するのは、連なるたくさんの記号のはずであり、フランス語ではただそれが複数であることによって示している。しかし、日本語では動詞を付加し、「記号の連なっていく時間」とハッキリさせる必要がある。

Toute la parole se tient dans cette usure des mots, dans cette écume toujours emportée plus loin, et il n'y a de parole que là où le langage fonctionne avec évidence comme une voration qui n'enlèverait que la pointe mobile des mots;

あらゆる語りは、このような言葉の損耗、このような常により先の方へと運ばれる泡のなかに支えられているのであって、言語が単語の動きやすい先端をしか取り上げない本性を持ったものとして、明白さをもって働くところにしか、語りというものはないのだ。

コトバはすべてこういった語の損耗と、こうしたつねにより遠くへ運ばれる泡の状態を保たれており、言語が語の動的な先端だけを取り去るような食欲な行為としてはっきりと機能するところにしかコトバは存在しない。

語りの全体は、このような語の損耗のなか、このような常により先の方へと運ばれて行く泡沫のなかにあるのであって、言語が明らかに語の可動的な先端だけを取り出すような貪りとして機能するところにしか、語りは存在しない。

話し言葉はすべて、言葉の摩滅のなかにある。より遠くへとつねに流されてゆくあの泡沫のなかにある。動きにみちた語の先端部だけを摘みとってゆくような貪り行為として言語活動がはっきりと機能するところにしか、話し言葉は存在しない。

話している時はいつも、そのように言葉が次から次と使われるはしから消えていく状態にある。つねに遠くへ遠くへと運ばれてゆく、そんな泡が吹くような状態にあるのだ。話される言葉は蠢く言葉の先端部だけを摘みとって貪るように、誰の目にも明らかに言語が機能していることが分かる時しか存在しない。

日本語の「言葉(ことば／コトバ)」という名詞はひじょうに一般性が高く、「langage

- langue - parole/discours - phrase - mot » と論理的に区別される言語の水準のすべてをカバーする。これらは「言語／言説／文／句／語」のような漢語によって翻訳されるが、「ランガージュ／ラング／パロール／ディスクール」というカタカナの音表記がかなり併用されている。それは翻訳においてどうしても意味がズレてしまうと認識されているからだろう。

« parole - mots » が「語り-言葉」、「コトバ-語」、「語り-語」、「話し言葉-言葉」と訳されているが、語義が含む動詞要素を反映したのは石川訳だけだ。しかし、これも「単一の名詞」でなければならないと拘束されたようで、日本語で区別される「話す言葉／話した言葉／話される言葉／話された言葉」ではなく、「話し言葉」を選んでしまっている。

しかし、フランス語は単純な用語の繰り返しを避けるため、言い換えを推奨するため、論理的にそれらの水準を区別する一方、別の水準の言葉を使って言い換えをする必要もあるため、同義的に言い換える場合も少なくない。

ここで « toute la parole » に使われた « toute la » は、「言葉」にではなく、「話す」のほうに重心がある、「話す時／話している時はいつも」のような文レベルの内容を名詞構文にただけだろう。日本語ではここを動詞構文に換えれば、「parole - mots」の名詞としての訳し分けは不要になる。そもそもこの « mots » はパロールで使われる語、つまりパロールだ。

« dans cette usure » が「損耗のなか／損耗の状態／摩滅のなか」と直訳されているが、漢文の書き下し文に似た、理解しにくい西洋型名詞構文の翻訳は、分かりやすく解説しようと思えば、和語を多用する動詞構文にされる。これには「使う ➡ 損失が出る (=なくなるものがある) ➡ 使えなくなる」というプロセスが含まれているのだが、漢字「耗／摩」の意味する「すり減る」は「すり減る前」の固い状態を暗示し、バルトがこれと対比させるエクリチュールの「固く凝固したイメージ」に寄ってしまい、ここですぐ後に続く « écume (あぶくくあわが吹く) » のイメージと矛盾を感じさせてしまう。「次から次と使われるはしから消えていく」ぐらいがいいだろう。

どの訳も « là où » を第一義の「ところ(場所)」としているが、バルトがここで示すのは「泡のように儂く消えて行く ➡ 時間」のイメージだ。日本語を「～するところに」ではなく、「～しているところに」と換えれば、フランス語と同じように転義として「時間」を表せなくないが、ハッキリ「時」を使った方がスッキリする。

« la pointe mobile des mots » に使われた形容詞 « mobile » が「動きやすい／動的な／可動的な／動きにみちた」と訳されている。単純な「動」の意味を核に持つ形容

詞だが、その一般性の高い単純さが、特殊なものを使い分けようとする日本語では繊細な「泡(あぶく)」のイメージと合いにくい。「目には見えにくい唇と舌の細やかな動きとそれにより変化する音」であれば、日本語では「蠢く」が出やすい。

*l'écriture, au contraire, est toujours enracinée dans un au-delà du langage, elle se développe comme un germe et non comme une ligne, elle manifeste une essence et menace d'un secret, elle est une **contre-communication**, elle intimide.*

それとは反対に、文章は、常に言語の彼方に根を張っていて、線のようにではなく、胚種のように成長するのである。それは、本質を表示し、秘密をもって脅かす。それは、反＝伝達であり、威嚇を与える。

ところが、エクリチュールはつねに言語のかなたに根をはっており、線のようにではなく胚種のように発展して、ある本質をあらわし、秘密でもって脅かす。エクリチュールは反伝達であり、人を威嚇する。

それとは反対に、エクリチュールは、つねに言語の彼方に根を張っていて、線のようにではなく、胚種のように成育するのだ。それは、本質を明示し、秘められたものをもって脅かす。それは、反伝達であり、威嚇を与える。

逆にエクリチュールは、言語活動の向こう側につねに根をおろしており、線のように伸びるのではなく、芽のように成長してゆく。ある本質を明らかにしたり、ある秘密でおびやかしたりする。反伝達行為であり、ひとを威圧してくる。

逆にエクリチュールは、かなたの言語に根をおろしたまま、一本の線のようにではなく、植物の芽のように伸びてゆく。それは本質的なものを明らかにしたり、秘密があると感じさせたりする。つまり今考えていることを伝えようという行為に反するものであり、それが読む者を怖じ気づかせる。

「今考えていることを伝えようという行為に反する」と日本語では 3～4つの動詞を使っておかしくない内容を« **contre-communication** »という名詞1語で表せるフランス語の効率の良さは数学の「約分」のようだ。これは長ったらしくなりやすい日本語と対比しなければ認識しにくい。

On trouvera donc dans toute écriture l'ambiguïté d'un objet qui est à la fois langage et coercition :

したがってあらゆる文章のなかには、言語であると同時に強制権でもある物体の持つ両義性が見出されることになる。

そこで、言語であると同時に強制権でもあるオブジェのあいまいさが、どのエクリチュールにも見出されるだろう。

そんなわけで、あらゆるエクリチュールのなかには、言語であると同時に強制権でもある客体の両義性が見出されることになる。

したがって、いかなるエクリチュールのなかにも、言語でありながら強制でもあるものという両義性が見出されるだろう。

そうすると、どんなエクリチュールも、(自然で自由な)言語でありながら(社会的・制度的な)強制でもあると両義的に見えてくる。

« à la fois langage et coercition » は逐語的に訳せば、「言語であると同時に／でありながら強制(権)でもある」となるのだが、同格に置かれた二つの名詞がアンバランスであるため、そのままでは意味不明だ。これらの言葉にバルトが込めた意味はここで使われた構文、配置から推量するしかない。というより、バルトはこのような「ずらせた同格」を意図的によく使う。これは図式化でき、誤解の余地のない単純な対立でなければ使えない。

「言語→自然で自由」と「強制→人為的・社会的・制度的」のアンチノミーと解釈させる。これは記号的なクイズのようだが、時間の中に消えて行く音声言語とは違い、視覚の対象(objet)となって時間を超えるエクリチュールのあり方を端的に示そうとしたのだらう。

il y a, au fond de l'écriture, une « circonstance » étrangère au langage, il y a comme le regard d'une intention qui n'est déjà plus celle du langage.

すなわち、文章の底には、言語とは異なった「事情」があり、もはや言語の意図とは別の意図の視線のごときものがあるのである。

すなわち、エクリチュールの根底には、言語の知らない《事情(シロスタス)》、言語の意図ではもはやない、意図の眼差しのようなものがある。

すなわち、エクリチュールの根底には、言語とは異質の《事情》があり、もはや言語のものではない意図の凝視のようなものがあるわけである。

エクリチュールの根底には、言語活動とは関係のない「状況」がある。言葉を伝えようとする意図ではすでになくなっている、べつの意図によるまなごしのようなものがある。

エクリチュールの根底には、(自然な)言語には縁のない「状況」がある。もはや(自然で自由な)音声言語のものではない内容を目で見ることができるのだ。

« regard(視線) » は前文の « objet » が目に見える視覚対象であることを示している。バルトは「意味・内容」を指して « pensée(考え) » と « intention(意図) » を標準のように使うが、言葉に込められるものと、言葉の背後に、というより、それに先行して存在する「考えの基本姿勢」の距離間を区別しているようだ。「n'est déjà plus(もう既に・・・ない) » は「intention(意図) → langage(言語) → écriture(エクリチュール)」というプロセスの時間性を意味している。

« langage(言語) » が「自然で自由」を表すと先に書いたが、音声を表記するフランス語と違い、漢字という表意文字、視覚イメージを使う日本語では「言語→社会的・制度的」と考えやすい。日本語翻訳では誤解が生じないように「自然で自由な音声言語」ぐらい書き加えたほうがいいだらう。

Ce regard peut très bien être une passion du langage, comme dans l'écriture littéraire;

この視線は、文学的文章におけるがごとく、うまく言語の情熱になることもありうるが、この眼差しは、文学的エクリチュールにあつてのように、たしかに言語の情熱となりうるが、この凝視は、文学的エクリチュールの場合のように、うまい具合に言語の情熱となることもありうるが、そのまなざしは、たとえば文学的エクリチュールにおいては言葉への情熱に大いになりうるし、文学的エクリチュールにおけるように、そのようなまなざしは、言語を積極的に使おうという情熱につながる可能性が高いが、

« une passion du langage » は「言語の情熱／言葉への情熱」と直訳すると、日本語としては何かが欠落していると感じられる。「文学→作家・詩人／読者」なのだから、これが暗示する「積極的、挑戦的に使う」と動詞を補ったほうがいだろう。

il peut être aussi **la menace d'une pénalité**, comme dans les écritures politiques :

また、政治的文章におけるがごとく、刑罰の脅威にもなりうる。
それはまた、政治的エクリチュールにあつてのように、刑罰の脅迫ともなりうるものである。
また、政治的エクリチュールの場合のように、刑罰の脅威ともなりうる。
政治的エクリチュールにおいては刑罰の脅しにもなりうる。
政治的に使われるエクリチュールのように、従わなければ罰を与えるぞという脅しになる可能性もある。

前文と同様、「**la menace d'une pénalité** (刑罰の脅威／刑罰の脅迫／刑罰の脅し)」も、名詞構文のままの翻訳では内容の論理が見えにくい。「従わなければ罰を与えるぞという脅し」ぐらいに動詞構文にしたほうがいい。

l'écriture est alors chargée de joindre d'un seul trait **la réalité des actes et l'idéalité des fins**.

そのとき、文章は、行為の現実性と目的の理念性とを一筆で結びつける任務を負うのである。エクリチュールはそのとき、もろもろの行為の現実性を目的の理想性と一気にむすびつける任務を背負う。
そのとき、エクリチュールは、行為の現実性と目的の理念性とを一挙に結合する任務を負わされるのだ。
その場合には、エクリチュールは行為の現実性と目的の理念性とをただちに結びつける必要がある。
その場合、エクリチュールは現実の行為・行動と、理想とする目標をすぐ分かるよう結びつけていなければならない。

« la réalité des actes et l'idéalité des fins » が「行為の現実性と目的の理念性を／行為の現実性を目的の理想性と／行為の現実性と目的の理念性を／行為の現実性と目的の理念性を」と訳されている。

フランス語は形容詞の内容を抽象名詞にして論理的な文を組み立てる。英語と違

い、形容詞が名詞に後置されるフランス語では、形容詞を名詞化すれば、名詞の前に出し、文の主要素として強調できる。

小林秀雄は「美しい『花』がある。『花』の美しさという様なものはない」と言ったが、小林に限らず、日本人は文法遣いの違いを特殊に区別しようとする。それはこれら二つの品詞遣いは書き手、話し手の意識のあり方が違うと考えるからだろ。しかし、同じ言葉の単純な繰り返しを避け、品詞、語彙を変えて頻繁にパラフレーズを行うフランス語はそれによって意味の違いを区別しようとしているわけではない。異なる言葉の間に「等価性、同義性」を見ようとする。つまり、形容詞を名詞化することで内容を抽象化するわけではなく、やはり意味としては自然な形容詞型のイメージを持っているはずだ。

日本語翻訳では「自然な構文➡形容詞＋名詞」としなければ、小林のように「不自然な抽象化」と感じてしまうだろう。

C'est pourquoi le pouvoir ou l'ombre du pouvoir finit toujours par instituer une écriture axiologique,

これこそ、権力、あるいは権力の影が、常に価値論的な文章を作り出すに至る理由なのだ。

権力あるいは権力の影がきまって、価値論的(アキシオジック)なエクリチュールをつくり出すにいたるわけはそこにある。

そうであるからこそ、権力なり権力の影なりは、つねに価値論的なエクリチュールを制定するに至るのである。

それゆえに権力やその幻影は、つねに価値論的なエクリチュールを最終的にうちたてることになる。

それゆえ、権力者、あるいは権力を笠に着る者は、必ず最終的に価値の規準となるエクリチュールを作り上げる。

« le pouvoir ou l'ombre du pouvoir » を直訳すると、「権力、あるいは権力の影」となるが、これは月並みな提喩(部分を使って全体を指す)だ。「pouvoir 権力➡権力者」だが、「ombre➡影」の直訳では何のことか分からないと感じたのだろう、石川訳は「幻影」としている。だが、これでは「権力と見えるだけで実質はない」と誤解させる。現実のリアルな状況を考え、「権力者、あるいは権力を笠に着る者」とハッキリさせたほうがいい。

où le trajet qui sépare ordinairement **le fait de la valeur** est supprimé dans l'espace même du mot, donné à la fois comme **description** et comme **jugement**.

そのような文章においては、ふつう事実と価値とを隔てているところの道程が、記述としてと同時に判断として与えられる単語の空間そのもののなかで、抹殺される。

そのようなエクリチュールにおいては、普通事実を価値から距てている道程が、叙述であると同時に判断として与えられる語の空間そのもののなかで省かれる。

そのようなエクリチュールにおいては、通常は事象と価値とを隔てている道程が、記述としてと同時に判断として持ち出される語の空間そのもののなかで、抹殺される。

普通ならば事実と価値とを区別してゆくはずの過程が、描写かつ判断としてしめされる言葉の空間そのもののなかで省略されてしまっている。

そして、描いたと同時に判定したことになる言葉の空間では、書く行為とそれを評価する行為を普通は隔てる行程がカットされてしまう。

バルトは「*le trajet qui sépare ordinairement le fait de la valeur*」と簡単に書いているが、「*le fait*⇒事実／事象」、「*la valeur*⇒価値」のような直訳では理解不能だ。「*le fait - la valeur*」のペアは後に出る「*description - jugement*」のペアと平行だ。「*valeur* (価値)」は前文の「*axiologique*<*axiologie* (価値論)」、またこの文で後に出る「*jugement* (判断)」と連動し、明らかに「価値を評価する(*évaluer*)」という行為を指す。これに釣り合う「*fait*」は「事実」ではなく、英語では使わない動詞「*faire* (する)」の派生名詞の「行為」という意味だ。これは「*jugement* (判断)<*juger* (判断する)」とペアにされている「*description* (描写)<*décrire* (描写する)」と連動し、「書く(*écrire*)」という行為を指す。

Le mot devient un *alibi* (c'est-à-dire un *ailleurs* et une *justification*).

単語は、アリバイ(すなわち、他所にして正当化)となるのだ。

語はアリバイ(いいかえると、ひとつの他処であって正当化)となる。

語は、アリバイ(すなわち別の場所であり弁明である)となるわけである。

語は、アリバイ(すなわち他所にあることと正当化すること)となる。

言葉はアリバイとなっている(すなわち、その時、そこで使ったのではないのだから、正しいと主張できる)。

簡略なメモのようなバルトの言葉を直訳しただけでは意味不明の日本語になる。「*alibi - ailleurs - justification*」の三語はこれだけで互いに最小限の文脈となり、意味が成立する。日本語翻訳で理解可能とするにはかなり書き加えなければならない。

Ceci, qui est vrai des écritures littéraires, où l'unité des signes est sans cesse fascinée par des zones d'infra- ou d'ultra-langage, l'est encore plus des écritures politiques, où l'alibi du langage est en même temps intimidation et glorification :

このことは、諸標章の統一性が下＝言語あるいは超＝言語の地帯によって絶えず眩惑されているところの文学的文章についても真実であるが、さらに、政治的文章については、より真実である。ここでは、言語のアリバイは、同時に威嚇であり、栄光なのだ。

こういったことは、諸記号の単一性が下あるいは超言語地帯によってたえず魅了されている文学的エクリチュールについても真実だが、政治的エクリチュールについてはいっそう真実であって、ここでは言語のアリバイは威嚇であるとともに賛美なのである。

このことは、諸標章(シニユ)の一体性が下言語(アンフラ・ランガージュ)なり超言語(ウルトラ・ランガージュ)なりの圏域によって絶えず魅惑されている文学的なエクリチュールについても真実であるが、さらに、政治的なエクリチュールについては、より真実であるが、そこでは、一言語のアリバイは、同時に、威嚇であり、称賛なのだ。

これは、記号の一体性が下部言語や超言語の領域にたえず魅きつけられてゆく文学的エクリチュールにかんしては正しいことだが、言語活動のアリバイが威嚇であり称揚でもある政治的エクリチュールにかんしてはいつそう正しい。

これは、作品における記号の意味の統一を図るため、いつまで経っても下層社会の言語、あるいは上流社会の言語のどちらかに引き寄せられる文学的エクリチュールに言えることだが、政治的エクリチュールについてはなおさらそうだとと言える。そこでは(自然な言語として存在する条件を満たさず虚ろな)アリバイに過ぎない言語を使うことが、脅しになると同時に、権力の栄誉ある代理人となることを示している。

« l'unité des signes est sans cesse fascinée par des zones d'infra- ou d'ultra-langage » とひじょうに抽象的な語彙を使っているが、差している内容は文学作品の具体的なありようだ。「infra-langage/ultra-langage」は「下層社会の言語／上流社会の言語」であり、接続詞の« ou »はこれだけで、二つのうちのどちらか一方に寄っていて、両方を組み合わせたり、混ぜたりすることはないと言っているようだ。

どの訳も« alibi »の意味を曖昧なままカタカナ表記で放置し、「intimidation et glorification」も名詞のまま直訳したため、この二つの名詞の芯となっている動詞« intimider(怖じ気づかせる)»と« glorifier(礼賛する)»が、そのような言語を使って書く人間、それともそれを読まされる人間のどちらを対象とするのかわからず、読まされる人間の方かと考えさせる。

しかし、バルトが10数行前に« l'ombre du pouvoir(権力の影➡権力を笠に着る者)»と書いた権力・権威の代理人は、下位の者に力を行使する者たちなのだが、「神がこう言った」、「マルクスはこう言った」、「党の方針はこう決定した」などがまさしく« l'alibi du langage(言語のアリバイ➡アリバイとなった言語)»の実例だろう。この場合、代理人たちは権力・権威に対して« intimidé(怖じ気づいている)»と同時に、その代理人となれることを栄誉と思い、自分を礼賛する(glorifié/se glorifiant)。

effectivement, c'est le **pouvoir** ou le **combat** qui produisent les types d'écriture les plus purs.

実際に、最も純粋な文章の範型を生み出すのは、権力あるいは戦闘なのである。

事実、権力や闘争こそがもっとも純粋なエクリチュールの典型を生み出している。

げんに、権力なり戦闘なりこそが、エクリチュールの最も純粋な範型を生み出しているのである。

実際に、権力や闘争こそがもっとも純粋な型のエクリチュールを生み出しているからである。

実際、もっとも純粋なエクリチュールのタイプを生み出すのは権力、あるいは権力闘争だ。

この章は « *écriture politique* (政治的に使われるエクリチュール) » と題されているが、« *pouvoir* (権力) » に « *combat* (闘争) » を並べるということは、絶対的な王権だけでなく、共産主義、社会主義による革命遂行時、また革命後に打ち立てられる独裁政権に共通する権力構造を考えているのだろう。

On verra plus loin que l'écriture classique manifestait cérémonialement l'implantation de l'écrivain dans une société politique particulière et que, parler comme Vaugelas, ce fut, d'abord, se rattacher à l'exercice du pouvoir.

後に述べるように、古典的な文章は、特定の政治的社会への作家の寄生を儀礼的に表示していたのであって、ヴォージュラのように語ることは、なによりもまず権力の行使に結びつくことであった。

後に述べるように、古典(主義)的エクリチュールは作家が特殊な政治社会に根をおろしていることを儀式的にはっきりと示していたし、ポージュラのように語ることは、何よりもまず権力の行使にむすびつくことであった。

のちに述べるように、古典主義的なエクリチュールは、特定の政治的な社会への作家の定住を儀式的に明示していたのであって、ヴォージュラのように語ることは、なによりもまず、権力の執行に合体することであった。

のちの章で述べることであるが、古典主義的なエクリチュールは、作家が特殊な政治社会のなかに身をおいていることを麗々しく示しており、ヴォージュラのように話すということは、なによりもまず権力の行使にかかわることであった。

古典エクリチュールは、書いた者が特殊な政治性のある社会に根を下ろしていることを恭しく示していること、またヴォージュラのように話すことは、まず権力の行使に結びついていることについては後の章で述べる。

文学のエクリチュールと政治のエクリチュールは区別されている。二つの間に「政治的な文学」は存在するが、後者は文学とは関わらない政治が主だろう。すると、「*écrivain*」は「作家(小説家)」に限らない。字義通りの「書く人/者」とすべきだ。

ヴォージュラ (Claude Favre de Vaugelas :1585 – 1650) には三つ後の章 « *Tiomphe et rupture de l'écriture bourgeoise* (ブルジョア・エクリチュールの勝利と破綻) » の章とここだけで言及する。「*plus loin*」はそこを指す。ここではそれを予告する形を取っているが、予告は往々にして「予告されるもの」が事実上先に書かれている。実体がまだない状態なら、予告することは普通できないからだ。

Si la Révolution n'a pas modifié les normes de cette écriture, parce que le personnel pensant restait somme toute le même et passait seulement du pouvoir intellectuel au pouvoir politique, les conditions exceptionnelles de la lutte ont pourtant produit, au sein même de la grande Forme classique, une écriture proprement révolutionnaire, non par sa structure, plus académique que jamais, mais par sa clôture et son double, l'exercice du langage étant alors lié, comme jamais encore dans l'Histoire, au **Sang répandu**.

(フランス大革命)は、思考する陣容が結局は同じものでありつづけ、ただ知的権力から政治的権力に移行しただけであるがゆえに、このような文章の規準を改変しなかったにせよ、それにもかかわらず、闘争の例外的な諸条件が、偉大なる古典的<形式>のただなかに、まさに革命的な文章を生み出した。ところで、それが革命的なのは、いまだかつてないほどアカデミックなものであったその構造によるのではなくて、その垣根やその裏地によるのである。当時、言語の行使は、(歴史)のなかでかつてないほど、流された<血>に結びついていたのだから……。

考える速中が結局は同じままで、単に知的権力から政治的権力の座に移行しただけだったのでフランス大革命はそうしたエクリチュールの規準ノルムを改変しなかった。しかし、たたかひの例外的な諸条件は、古典(主義)的大形式のまっただなかに、いわゆる革命的エクリチュールをやはり生み出しはした。けれども、それが革命的といえるのは、かつてより以上にアカデミックだった構造のせいではなくて、エクリチュールの囲いと影のせいであった。言語の行使がそのとき歴史上未聞のように、拮がった血にむすばれていたからである。

〈フランス大革命〉は、思惟にかかわる人員が結局は同一であり続けていて、ただ知的な権力から政治的な権力に移行しただけであったために、このエクリチュールの諸規準を改変しなかったにしても、それにもかかわらず、闘争の例外的な諸条件が、古典主義的な大<形式>のただなかに、本来的に革命的なエクリチュールを生み出した。ところで、それが革命的なのは、いまだかつてないほどアカデミックであったその構造によるのではなくて、その閉域やその分身ランガージュによるのである。当時、言語ランガージュの行使は、〈歴史〉上かつてないほど撒き散らされた〈血〉に結びついていたのだ。

このようなエクリチュールの規準はフランス革命においても変わらなかったが、それはものを考える立場にある人たちが結局は同じままでありつづけて、知的権力から政治的権力へ移行しただけだったからである。ところが、闘争という特別な状況が「古典主義の偉大な形式」のただなかに、まさしく革命的なエクリチュールを作り出したのだった。その構造ゆえにではなく一構造はかつてないほど伝統墨守であった一、その閉塞性と二重性ゆえに革命的となったエクリチュールを。当時は言語活動の行使が、「歴史」上いまだかつてないほど「流血」に結びついていたのである。

このようなエクリチュールの規準はフランス革命によっても変わらなかった。それは、ものを考える立場にある人々が結局は同じままで、知的権力だったものが政治的権力に移行しただけだったためだ。しかし、闘争という特別な状況が「偉大な古典のかたち」のただなかに、まさしく革命的なエクリチュールを生み出した。革命的だったのはその構造ゆえではない(構造はかつてないほど伝統を重んじた)。その閉鎖性と二重性ゆえだ。その時代、「歴史」上かつてないほど、言語の使い方を理由に殺戮が行われた。

日本語訳は2~4文になっているが、フランス語の原文は、条件節(+理由節)、長い主節、分詞節を1文に組み立てている。どうしてこれほど長くしたのかと日本人なら問うところだが、それは語、句、文の配列に「自然な展開の時間」をバルトが求めたからだろう。文を論理によって構築するフランス語は1文には中心となる一つの時間単位しか見ない。そのように文の内容を豊かなものとするために様々にパーツを書き加えるエクリチュールは、中心と周辺を一つの画面に組み立てる西洋絵画の透視図法の構成に似ている。

「言語／言語活動の行使」と訳されている « l'exercice du langage » という理由と、「流された〈血〉／拡がった血／撒き散らされた〈血〉／『流血』」と訳されている « Sang repandu » という結果が一つの分詞節に組み合わされているが、解釈される内容が「理由＋結果」の2文レベルのものなのだから、直訳ではあまりにも抽象レベルが高くなる。この最後の部分だけこれほど「圧縮」したのは既にこの文全体が長くなり過ぎていると感じたからではないだろうか。たくさん盛り込んで長く豊かな文を構築する時、パーツを短く圧縮しようという意識が生じる。「言語の使い方を理由に殺戮が行われた」ぐらいがいいだろう。

Les révolutionnaires n'avaient aucune raison de vouloir modifier l'écriture classique, ils ne pensaient nullement **mettre en cause** la nature de l'homme, encore moins son langage,

彼らは、なんら人間の本性を問題にしようとは考えていなかったのであり、いわんやその言語を問題にしようとは考えていなかった。

革命家たちには何も古典〈主義〉的エクリチュールを改変しようと望む理由はなかったし、かれらは人間の自然を問題にしよう、ましてやその言語を問題にしようとはけっして考えなかった。

〈革命家〉たちは、古典主義的なエクリチュールを改変しようと望む理由をまったく持っていなかった。彼らは、人間の本性を問題にしようとか、いわんやその言語を問題にしようなどとは、まったく考えていなかったのである。

革命家たちには古典主義的なエクリチュールを変えたいと思う理由などまったくなかったし、人間の本性やましてやその言葉を問題にすることなど、いっさい考えていなかった。

革命家たちには古典エクリチュールを変えたいと望む理由などまったくなかったし、人間の本性、ましてその言葉を訴えようなど思いもしなかった。

« mettre en cause » が一様に「問題にする」と訳されているが、「問う(questionner)+題(topic)」が基になったこの熟語は « problème » の訳に使われる場合も婉曲だが、「訴訟→糾弾→判決」だけでなく、前文にあるように「Sang 血→処刑」に至る起点なのだから、少なくとも「法廷・裁判」のイメージを示すほうがいい。「訴える→裁く→処罰する」の「訴える」か「裁く」がいいだろう。

et un « instrument » hérité de Voltaire, de Rousseau ou de Vauvenargues, ne pouvait leur paraître **compromis**.

それで、ヴォルテールやヴォーヴナルグから引き継いだ「道具」が危殆に瀕していると彼等に見えることはありえなかったのだ。

そして、当然のようにかれらにはボルテールやルソーやボープナルグから継承された《道具》が危殆に瀕しているなどとはおもえなかった。

そして、ヴォルテールやルソーやヴォーヴナルグから引き継いだ《道具》が危険にさらされていると彼らに見えることはありえなかったのだ。

ヴォルテールやルソーやヴォーヴナルグから受け継いだ「道具」が価値を失っているとは、彼らには見えなかったのである。

ヴォルテール、ルソー、あるいはヴォーヴナルグから受け継いだ「道具」が信用できないと彼らに見える可能性はなかった。

« *compromis* » が三つの訳で「危殆に瀕している／危険にさらされている」とされているが、石川訳は「危殆／危険」では具体的に何を意味するか分からないと判断したようだ。「危険⇒価値を失っている」と具体化している。しかし、「無価値」では「裁判」など開く必要はないことになる。裁かねばならないのは「価値を失っているかもしれない＝信じていいかどうか分からない＝信用・信頼できない」という状況だ。

C'est la singularité des situations historiques qui a formé l'identité de l'écriture révolutionnaire.

これは、革命的な文章の身元を形成した歴史的状況の奇妙さである。

歴史的状況の特異さが革命的エクリチュールの身元を証明している。

歴史的な状況の独異性こそが、革命的なエクリチュールの独自性を形成したわけである。

だから歴史状況の特殊性こそが、革命的なエクリチュールの独自性を形成したのだった。

歴史状況が特殊だったために、革命のエクリチュールは独特のものになった。

« *a formé* » の主語と目的語になっている二つの抽象名詞 « *singularité* (特異性*) »、« *identité* (独自性*) » は理由と結果という文レベルの内容を圧縮している。これらの基となっている形容詞 « *singulier* (特異な) »、動詞 « *identifier* (同定する・識別する) » をコアとする二つの文を理由-結果として繋がなければ、日本語では理解されにくい。フランス語ではこのような書き換え(文⇒名詞、名詞⇒文)を頻繁に行い、そうできることが内容を理解している証明となる。これは漢文と書き下し文の書き換えに似ている。こんなフランス語を構文そのままに直訳すると、漢文 A を漢文 B に言い換えただけのようになり、内容が歪む可能性がある。

« *C'est~qui~* » を渡辺訳 1 はただの関係詞節と、渡辺訳 2 と石川訳は強調構文ととり、森本訳は無視している。文レベルの内容がこの構文で組み合わせられると、強調されたと見える「理由」項が先行し、「結果」項が後置されることになり、現象的に自然な配列になる。バルトは構文の主従(従属)関係(subordination)を原理通りにはあまり使わない。日本の英語教育では文法のポイントとして「強調構文」「従属関係」を強調し、その翻訳のしかたをさまざまに工夫するが、それは、日本語が本来抑揚のない淡々と繋がる構文を使っていることを逆照射していると言える。

Baudelaire a parlé quelque part de « la **vérité emphatique** du geste dans les grandes circonstances de la vie».

ボードレールは、どこかで「人生の重大な状況における身振りの強勢的な真実」について語っている。

ボードレールは、「人生の大状況においてはミブリが大げさになることの真実」についてどこかで語っていた。ボードレールは、どこかで、「生の大状況における所作の強勢的な真実」について語っている。

ボードレールがどこかで「人生の重大な状況において身ぶりがしめす誇張された真実」について語っていたが、

ボードレールはどこかで「人生の重大な局面でどうして身振りが誇張されるか」について語っていた。

どれも « la vérité emphatique du geste » を直訳しているが、これでは内容が理解しがたい。名詞 « vérité (真実) » ➡ 疑問詞 « pourquoi (どうして) »、形容詞 « emphatique (強調の・誇張した) » ➡ 動詞 « exagérer (誇張する) » のように自然な品詞構成に戻したほうがいい。

La Révolution fut par excellence l'une de ces grandes circonstances où la vérité, par le sang qu'elle coûte, devient si lourde qu'elle requiert, pour s'exprimer, les formes mêmes de l'amplification théâtrale.

〈大革命〉は、すぐれて、このような重大な状況のひとつだったのであって、そのような状況においては、真実は、それが支払わねばならない血によって、非常に重いものになるので、おのれを表現するために、まさに演劇的な誇張の形式を必要とするのだ。

大革命はすぐれてそうした大状況のひとつだったので、真実は、それが支払う血によって大変重いものになり、自分を表現するのに、演劇的誇張の形式そのものを要求している。

〈大革命〉は、このような大状況のひとつだったのであって、そのような状況においては、真実は、それが支払わねばならない血によって、まことに重いものになるので、おのれを表現するために、まさしく演劇的な大袈裟化の形式を要求するのだ。

フランス革命とはとりわけそのように重大な状況のひとつであった。流される血ゆえに、事実は非常に重苦しくなり、その事実を表現するには演劇的な誇張のある形式そのものが必要であった。

フランス革命とはとりわけそのような重大な局面のひとつであった。血が流されるゆえに、どうして処刑するのか、示される理由はひじょうに重いものとなり、それを表現するには演劇的に誇張した「かたち」が必要とされたのだ。

三つの訳が « vérité » を「真実」と直訳しているが、「真実・事実 ➡ 事実関係 ➡ 因果関係 ➡ 理由(どうして)」のような言い換えがいい。石川訳の「事実」は「本当の事実」と使えば「真実」と同等になるが、これのみではおそらく「事実 ➡ 処刑」としか解釈されず、誤解を引き起こす。

L'écriture révolutionnaire fut **ce geste emphatique** qui pouvait seul continuer l'échafaud quotidien.

革命的な文章は、そのみが日々 の処刑台を継続することができたところの、このような強勢的な身振りだったのである。

革命的エクリチュールは大げさなミブリであり、それこそが日々断頭台で処刑をつづけることを可能にしたのだった。

革命的なエクリチュールは、このような強勢的な所作だったのであって、それだけが日々断頭台処刑を継続することができたのだ。

革命的なエクリチュールとはその誇張された身ぶりであって、そのみが毎日の死刑を続行させることができたのである。

革命のエクリチュールとはそのような身振りの誇張であり、そうすることによってしか日常的に処刑し続けることなどできなかった。

« ce geste emphatique (大げさな身振り*) » も、先の例と同様「身振りを大げさにする」が基にある。品詞を入れ替えた「身振りの誇張」とも実質的には変わらない。名詞＋形容詞 « l'échafaud quotidien (日常的な処刑*) » も、品詞を変えた副詞＋動詞「日常的に処刑する」と等価になる。

Ce qui paraît aujourd'hui de l'enflure, n'était alors que la taille de la réalité.

こんにち誇張と見えるものが、当時においては、現実の背丈に合っていたのだ。

今日では誇張に見えるものが当時では現実の背丈にすぎなかった。

こんにち誇張と見えるものが、当時においては、現実の背丈にほかならなかった。

今日では大げさに見えることも、当時は現実に見合ったものにすぎなかった。

今日では誇張に見えるものも、当時はそれが等身大の現実だったのだ。

三つの訳が名詞＋名詞 « la taille de la réalité » を「現実の背丈」と直訳しているのに対して、石川訳は日本語として据わりがいいように « taille » を動詞を使った構成に変えている。ただこの訳「見合ったもの」では「現実のサイズ vs 誇張されたサイズ」の対照が感じられなくなっている。前後を逆にし、「現実の背丈 ➡ 背丈の現実 ➡ 等身大の現実」とすると、普通の日本語になる。これでフランス語の意味するものが変わるわけではない。

Cette écriture, qui a tous les signes de l'inflation, fut une écriture exacte :

あらゆるインフレーションの徴候を持っているこの文章が、正確な文章だったのである。

ありとあらゆるインフレーションのしるしをもっているそうしたエクリチュールが正確なエクリチュールだった。

あらゆるインフレーションの徴候を持っているこのエクリチュールが、正確なエクリチュールだったわけである。

誇張をしめす記号にみちたエクリチュールも、当時を正確にあらわすエクリチュールであった。

何から何まで誇張を示すこのエクリチュールは状況を正確に映し出したエクリチュールだった。

« qui a tous les signes de » を三つの訳は「の徴候を持っている／のしるしをもって
いる」と直訳しているが、石川訳は「をしめす記号にみちた」と動詞を補っている。
しかし、「avoir les signes de (記号を持つ)」 ➡ « signifier (示す) » とするなら、名詞「記
号」を使わなくてもいいだろう。

jamais langage ne fut plus invraisemblable et moins imposteur.

言語が、これほど本当らしくなく、しかも詐欺的でなかったことはかつてなかった。
言語がこれほどほんとうらしくなくて、しかも詐欺的でないことはかつてなかった。
言語が、これ以上に本当らしくなく、しかも詐欺的でないことは、いまだかつてなかった。
言葉がこれほど奇異にみえて、これほど欺瞞のなかったことは、いまだかつてなかった。
言葉がこれほど奇異に見えながら、これほど偽りのなかったことはかつてなかった。

石川訳だけが形容詞構文を直訳せず、動詞構文に変えている。ただ接続詞 « et » を
単に同格とすると、様々な接続表現を細かく使い分けるようになった現代の日本語
では「逆接を順接で」となるため、古風と感じてしまう。「ながら」ぐらいが適切
だろう。

Cette emphase n'était pas seulement la **forme** moulée sur le **drame**; **elle en** était aussi la conscience.

この強勢法は、単に芝居を手本にした形式なのではなくて、その自覚でもあったのだ。
この誇張は単にドラマにかたどられた形式であっただけではなくてまた、ドラマの意識にほかなら
なかった。
この強勢法は、たんに劇的情况にて作られた形式だっただけではなくて、また、その自覚でもあっ
たのだ。
そうした誇張は悲劇にふさわしい形式だっただけでなく、悲劇の意識でもあった。
この誇張は演劇を手本とした「かたち」だっただけではない。誇張は演劇の意識の持ち方でもあっ
た。

« forme » を「様式」のように「式」を含み、「反復・再生産」を意味する「形式」
と訳すと、誤解を生むことについてはこれまで度々触れた。「意味・内容」の器とな
る「言葉・表現」を示すもつとも抽象的な語彙としてバルトが使う « forme » は「形
／かたち／フォーム」としなければならない。

「誇張」は悲劇だけではなく「演劇／芝居」の一般的な特徴だ。「le drame」は「悲
劇」と訳すべきではない。

« elle en était aussi la conscience » の « elle » を訳出しなかつたり、代名詞 « en » を
機械的に「それ／その」とすると単純化された文の場合、短すぎて内容が理解できな
くなる。森本訳と石川訳は « en » = « du drame (ドラマ／悲劇の) » と明示している

が、日本語は代名詞を使わず同じ名詞を繰り返すことが多い。また、演劇が「内容」を欠いた表面的な「かたち」を見せているわけではなく、それには「意識」という内容がなければならないと、古代演劇を学生の頃から研究して来たバルトは考えているはずだ。それを踏まえて訳せば、「意識→意識の持ち方」程度の書き加えが要るだろう。

Sans ce drapé extravagant, propre à tous les grands révolutionnaires, qui permettait au girondin Guadet, arrêté à Saint-Émilion, de déclarer sans ridicule parce qu'il allait mourir :

すべての偉大な革命家たちに固有の、この途方もない道具なくしては、・・・この道具こそが、サン・テミリオンで逮捕されたジロンド党員ギュアデに、つぎのように言うてのけることを可能ならしめたものなのである。そして、彼がまさに死なんとしていたのであるがゆえに、ここには滑稽さはないのだ。

たとえば、サン＝テミリオンでつかまったジロンド党員のギュアデは、死を目前にしていたから何ら滑稽さはなく、・・・と云うてのけたが、これはすべての大革命家たちに特有な、途徹もないポーズだった。そして、こうしたポーズがなかったら

すべての偉大な革命家たちに固有のこのような途方もない衣裳だてなしには、・・・この衣裳だてこそが、サン・テミリオンで逮捕されたジロンド党員のガデが次のように言うてのけることを可能にしたものなのである。ここに滑稽さが無いのは、彼がまさに死のうとしていたからである。

あらゆる大革命家たちに特有のあの特異な表現のひだがあったからこそ、サン＝テミリオンで逮捕されたジロンド党員ガデも、冗談からではなく、--彼は死を目前にしていたのだから--こう言うことができたのだ。革命家たちのこのような表現のひだがなければ、

すべての偉大な革命家たちに特有のものだが、サン＝テミリオンで逮捕されたジロンド党員ガデにも、こう言わせる(死を目前にしていたのだから冗談ではない)、長々とした装飾的口上もしなかったなら、

« drapé extravagant » が「途方もない道具／途徹もないポーズ／途方もない衣裳だて／特異な表現のひだ」と訳されている。「drapé」は「L'écriture et le silence (エクリチュールと沈黙)」の章でも使われており、そこでは「Cette grande écriture traditionnelle, celle de Gide, de Valéry, de Montherlant, de Breton même, signifie que la forme, dans sa lourdeur, dans son **drapé exceptionnel**, est une valeur transcendante à l'Histoire, comme peut l'être le langage rituel des prêtres.» 「ジッド、ヴァレリー、モンテルラン、そしてブルトンさえ含むのだが、彼らのエクリチュール、あの偉大と見えたエクリチュールを生み出す伝統は、「かたち」がその重々しさ、他では見られない「装飾のひだ」によって歴史を超越する価値があることを示している。儀式で使われる司祭の言葉がそうなるように。(拙訳)」となっている。

これはキリスト教の宗教画などで画家の重要な表現技術のポイントと見なされる「描かれた聖人などの人物が身に付けている衣裳のドレープ(襷)」だ。これを「文学の

本質から外れた凝った文体」を指す隠喩として使っている。「長々とした装飾的口上」と訳していいだろう。（補遺に続く）

*紙数に制限があるため、ここで筆を置く。この章の残りの部分については昨年までと同様、試訳と考察を広島大学図書館リポジトリで公開する PDF 版には補遺（S - 1～34 頁）として付ける。

http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/ja/journal/ej_HU_France/all_index

*フランス語の原文と四つの翻訳全てを文毎に分析する試みは *Introduction* 「序」からではなく、最も具体的で語数も多い *L'écriture du Roman* 「小説のエクリチュール」の章から始めたが、*L'écriture et le silence* 「エクリチュールと沈黙」までの筆者の試訳をすべて繋いだものは以下で公開している。

中川正弘、ロラン・バルト『零度のエクリチュール』の翻訳：間言語的迷走と文法の記号学、広島大学国際センター紀要、6号、2016年

(http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/ja/journal/ej_HUIC/--/6/article/39810)

Introduction 「序」(1084 語)

Qu'est-ce que l'écriture? 「エクリチュールとは何か」(2150 語)

☆ *Écritures politiques* 「政治に使われるエクリチュール」(2058 語)

★ *L'écriture du Roman* 「小説のエクリチュール」(2640 語)

★ *Y a-t-il une écriture poétique?* 「詩のエクリチュールのようなものはあるのか?」(2493 語)

★ *Triomphe et rupture de l'écriture bourgeoise* 「ブルジョア・エクリチュールの勝利と破綻」(1385 語)

★ *L'artisanat du style* 「文体の匠」(871 語)

★ *Écriture et révolution* 「エクリチュールと革命」(1418 語)

★ *L'écriture et le silence* 「エクリチュールと沈黙」(1036 語)

★ *L'écriture et la parole* 「エクリチュールと話される言葉」(980 語)

★ *L'utopie du langage* 「言語のユートピア」(933 語)

★は分析、翻訳済み

*広島大学図書館に限らないが、リポジトリに登録、公開されている文書(PDF)は GoogleChrome などのブラウザで URL を使ってサイトにアクセスすれば、閲覧、ダウンロードできる。しかし、現在ではブラウザの検索ウィンドウに直接、著者名、タイトルを書き込んで検索してもヒットするので、そのほうが早い。

また、そのような PDF はブラウザから直接全文検索が可能であるため、フランス語の原文、あるいは四つの日本語翻訳テキストのどれかを読んでいて、内容の理解できない文(誤訳?)にぶつかり、他の日本語訳、フランス語原文を参照したければ、その部分を固有の組み合わせになる長さ(5~10 語分)で検索ウィンドウに書き込み、検索すればヒットし、該当ファイルにアクセスできる。さらに、そのフレーズをその文書内で検索(Mac: command+F/Windows:Ctrl+F)すればその箇所が表示される。

Roland Barthes : *Le Degré zéro de l'écriture*
— la traduction japonaise et le relativisme stylistique —

Masahiro NAKAGAWA

Il est ennuyeux de dire ou écrire en plusieurs mots une chose que l'on peut penser en un seul. Un mot précis suffit normalement à l'écrivain, mais il le paraphrase parfois pour ceux qui ne comprennent pas son choix.

Barthes paraphrase souvent. Mais ce qu'il ajoute ne constitue pas pour ses lecteurs, à proprement parler, un enrichissement du premier mot. Après un mot ambigu, il réécrit avec un autre mot, mais ce nouveau mot nous semble tout aussi ambigu. Quel est donc le meilleur des deux ? S'il y en avait un, Barthes nous le donnerait seul, sans le mettre en comparaison avec un autre mot. Cela signifie qu'aucun des deux mots proposés n'est précis et essentiel.

Ces mots choisis par Barthes, il est peu recommandé de vouloir les traduire en autant de mots précis japonais. Le contenu essentiel, que Barthes appelle « intention/pensée », n'est pas enfermé dans les mots-signes mais se trouve au-delà. Pour Barthes, son mot ne peut être précis et unique qu'au moment du choix, et son efficacité disparaîtra dès lors qu'il en choisira un autre pour désigner le même objet.

Barthes dit que le contenu du poème est prosaïque. Plutôt que les phrases, temporairement précises, de Barthes en train de penser, ce sont donc ses intentions, ses vues au-delà de ces mots, qui doivent être recherchées. Pour cela, sans doute faudrait-il que la paraphrase en japonais soit assez longue et intelligible, même si l'auteur français la jugerait sans doute redondante et ennuyeuse.

Il n'y a pas de grammaire absolue. Vers contre prose, langue française contre langue japonaise, toute transformation langagière doit être relativisée.

補遺

Oui, je suis Guadet. Bourreau, fais ton office. Va porter **ma tête** aux tyrans de la patrie. **Elle** les a toujours fait pâlir : abattue, elle les fera pâlir encore davantage »,

「そうだ、俺がギユアデだ。首切役人め、お前の仕事をするがいい。俺の首を、祖国の圧制者どものところへ持って行け。この首は、いつも奴らをぞっとさせたものだが、打ち落されてみれば、もっとよけいに奴らをぞっとさせることだろう。」

「そう、俺はギユアデだ。首斬役人め、お前のつとめをするがいい。祖国の圧政者どものところへ俺の首をもっていけ。こいつはいつも奴らをふるえあがらせた。打ち落されたら、さぞかしいっそうのことだろうぜ」

「そうとも、俺がガデだ。お前の仕事をするがいい。俺の首を、祖国の圧政者どものところへ持って行け。この首は、いつも奴らをぞっとさせたものだが、打ち落とされてみれば、もっとよけいに奴らをぞっとさせることだろう」。

「そうだ、わたしがガデだ。死刑執行人よ、おまえの任務をはたすがいい。わたしの首を祖国の圧制者たちのもとへと持って行け。やつらは、この首を見るたびに青くなっていた。切り落とされた首なら、なおさら青ざめることだろう。」

「そうだ、わたしがガデだ。死刑執行人よ、おまえの務めを果たすがいい。わたしの首を祖国の圧制者たちのもとへと持って行け。やつらは、この顔を見るたびに青くなっていた。切り落とされた首なら、なおさら青ざめることだろう」

« ma tête » 自体は「俺の首」でもいいのだが、「**Elle les a toujours fait pâlir**(奴らをいつも青ざめさせた)」は「首」が主語では日本語としておかしくなる。これは「顔」のはずだ。日本語もフランス語も « tête (頭部) » と « face (顔) » は区別されるが、フランス語の « tête » は日本語で「顔」を使う場合にも使われ、これも訳語として辞書に載っている。

日本語の「首」は原義としては「頸部(頭と胴をつなぐ、やや細くなった部分)」だが、これを提喩(部分で全体を指す)として婉曲に「頭部」を指す。日本語は主観的な「わたし」の視点を標準とするため、記号的意味に溢れた「顔」に注目しやすい。一方、客観的な第三者の視点を標準とするフランス語は単純に区別するだけで、「cou(首/頸部)」や « face (顔) » など使わず、即物的に « tête (頭部) » を選ぶ。

la Révolution n'aurait pu être cet événement mythique qui a fécondé l'Histoire et toute **idée** future de la Révolution.

<大革命>は、<歴史>や後代の<大革命>観全体を豊饒ならしめたところの、あの神話的な事件になりえなかったであろう。

大革命は歴史と、一切の後代の大革命観をゆたかにした、あのような神話的事件にはなりえなかったのではあるまいか。

<大革命>は、<歴史>や後代のあらゆる<大革命>観を豊饒にした神話的な事件でありえなかったであ

ろう。

フランス革命はあの神話的な事件にはなりえなかつただろう。「歴史」と、革命をめぐる後世の概念全体とを豊饒なものにした神話的な事件にはなりえなかつただろう。

フランス革命は、後世の「革命」の見方と「歴史」を豊かなものにする神話的な出来事とはなりえなかつただろう。

三つの訳が « *idée* » を独立した一語で訳さず、「大革命観」と漢字を1字付加するだけにしたのは、普通に一語で訳せば先行する「歴史」にもこれがかかってしまうため、それを避けるためだろう。石川訳のみ「概念」と独立させているが、これが「歴史」にはかからないことを示すために「『歴史』と、革命をめぐる…」のように接続詞「と」の後に読点(,)を入れ、「革命」のほうには括弧(「)をつけないなど、工夫している。

しかし、「*a fécondé*(豊かなものにした)」の二つの目的語「歴史」と「革命」の並べ方に時間的意味はないようだ。二つはただ同格の項として並置されただけで、内容のバランスから強いて前後性を考えれば、「革命(部分)➡歴史(全体)」となるのが自然だ。日本語訳ではそれを考慮し、「後世の『革命』の見方と『歴史』と…」とすれば係り方の混乱は生じない。

L'écriture révolutionnaire fut comme l'entéléchie de la légende révolutionnaire :

革命的な文章は、革命伝説の現動態のごときものであった。

革命的エクリチュールは革命伝説の円満実現(アンテレシイ)のようなものだった。

革命的なエクリチュールは、革命的な伝説の円現(エンテレケイア)のようなものとなった。

革命的なエクリチュールとは、革命伝説のエンテレケイアのようなものであった。

革命のエクリチュールとは、可能性としてあった革命伝説が形となって現れたようなものだった。

ギリシア語起源の « *entéléchie* » は「可能性を実現している状態」であり、これはフランス語でも一語では説明、翻訳ができない。日本語訳では少なくとも「可能性」「実現」の二語は使って構文を変える必要がある。

具体レベルでは前後で区別されるプロセスを一語で捉えると、それだけ抽象度が高くなる。「*entéléchie*」をバルトはここ以外どこでも使っていないということは、これを書いていた時、言語を抽象的に使う姿勢がそれほど強かったと考えていいのだろう。

elle intimidait et imposait une consécration civique du Sang.

すなわち、それは、威嚇を与え、公民的なく血の祝聖を課したのである。

つまり、それは脅威を与え、血の市民的祝聖を課したのである。

それは、威嚇を与え、〈血〉の公民的な是認を罷り通らせていたのだ。

威嚇し、「血」の容認を市民に強いたのである。

怯えさせて、「血」が流されることを容認するよう市民に強いたのである。

先に« intimidation(<intimider)» が出ていたが、形容詞 « timide(臆病な)» から作られたこの動詞は「威嚇する」と訳せる場面が多い。しかし、フランス語では「威嚇する(原因) ➡ 臆病・怯える(結果)」を一つに統合したような使い方をするが、日本語ではこれら二つの相を特殊に区別した使い方になることが多い。「威嚇」だけではその対象となる相手側の状態が含まれず、相手が「臆病」ではなく、この行為が効果を持たない場合を想起させやすい。ここでは「怯える+使役 ➡ 怯えさせる」が適切だろう。

« une consécration civique du Sang » を3つの訳は逐語的に「公民的な〈血〉の祝聖／血の市民的祝聖／公民的な是認」としているが、石川訳は内容の論理を汲んで、「『血』の容認を市民に」としている。日本語ではもう一歩進め、「血を ➡ 血が流されることを」とイメージを具体化してもいいだろう。

L'écriture marxiste est tout autre.

マルクス主義的な文章は、まったく別のものである。

マルクス主義的エクリチュールはこれとはまるでちがう。

マルクス主義的なエクリチュールは、まったく別のものである。

マルクス主義的エクリチュールのほうは、まったく異なっている。

マルキストのエクリチュールは、まったく違う。

何度も言及したが、「～的な／～的」は単純に名詞を形容詞化する中国語と違い、日本語では普通名詞句「～の」と差異化し、「～のような」の意味で使う。「～の」がそのものとして同じになるのに対し、「～のような ➡ 似ている ➡ 似ているが、それと同じではない」のような使い方になる。

「マルクス主義的」では「マルクス主義に似ている ➡ マルクス主義に似ているが、そのものではない」になってしまう。

Ici la clôture de la forme ne provient pas d'une **amplification** rhétorique ni d'une **emphase** du débit, mais d'un lexique aussi particulier, aussi **fonctionnel** qu'un vocabulaire technique;

ここでは、形式の垣根は、誇張からも、語り口の強勢法からも来るのではなくて、技術的な術語と同等に特殊的で機能的な語彙から来るのだ。

ここでは、形式の囲いは修辞上の誇張や強勢的な語調ではなくて、テクニカル・タームと同様に特殊で機能的な語彙に由来している。

ここでは、形式の閉域は、修辞学的大袈裟化とか語り口の強勢法とかに由来するのではなくて、専門的な語彙と同等に特殊的で機能的な用語に由来するのだ。

その形式の閉塞性は、誇張的な修辞や大げさな口調からではなく、専門用語とおなじぐらい特殊で機能的な語彙から生じている。

そのフォルムの閉塞性は、修辞的な誇張や言葉遣いの誇張からではなく、専門用語と同じぐらい特殊で機能本位の語彙から生じている。

« amplification » と « emphase » はフランス語だから繰り返しを嫌い、言葉を変えているが、日本語では言葉を変えようとせず、「誇張」を繰り返すところだ。

« fonctionnel » は逐語訳では「機能的」としやすいが、この日本語は「便利・役に立つ⇒好ましい」というポジティブな意味に特化した使い方をしている。ここでは「不便・役に立たない⇒好ましくない」というネガティブな意味も含むため、抽象度が一段高く、ニュートラルな「機能本位」くらいが適切だ。

les métaphores elles-mêmes y sont sévèrement codifiées.

隠喩でさえも、そこでは厳格に法典化されている。

隠喩ですらもそこではきびしく法典化(コード化)されている。

そこでは、隠喩そのものも、厳に法典(コード)化されている。

隠喩そのものが厳格に符号化されているのである。

隠喩そのものが厳格にコード化されている。

« code > codifier(動詞) » の訳語としては「符号、記号、暗号、略号、規則、規定、法典、・・・」などさまざまなものが並ぶ。これらは特殊に区別され、使い分けられているということだが、どれにも収まらず、一般性を高くしなければならない場合に使うのがカタカナ表記の「コード」だ。

L'écriture révolutionnaire française fondait toujours un droit sanglant ou une justification morale; à l'origine, l'écriture marxiste est donnée comme un langage de la connaissance;

フランスの革命的な文章は、常に血腥い権利や道徳的な正当化を支えていた。ところが、マルクス主義的な文章は、最初は、認識の言語として与えられた。

フランスの革命的エクリチュールはつねに血のしたたる権利とか、道徳的正当化を基礎づけていた。

しかし、本来マルクス主義的エクリチュールは認識(コネッサンス)の言語として与えられたものであり、

フランスの革命的なエクリチュールは、つねに、血にまみれた権利なり道徳的な弁明なりを根拠づけていたのだが、マルクス主義的エクリチュールは、その始源において、認識の言語として持ち出された。

フランス革命のエクリチュールは血を流す権利や倫理的正当性をつねに根拠づけたが、マルクス主義的エクリチュールはそもそも認識言語のように生み出されたのだった。

フランスの革命家のエクリチュールはずっと人を殺す権限の根拠となり、そうすることが道徳的で

あると正当化する根拠となっていたが、マルキストのエクリチュールはそもそも物事、歴史(フランス革命を含め)を後から認識する言語として生まれたからだ。

三つの訳はフランス語の品詞遣いそのまま直訳したため、形容詞 « française (フランスの) » を « l'écriture » にかかけ、「フランスのエクリチュール」としており、石川訳のみ「形容詞+形容詞」を「**名詞**+形容詞」のように「フランス革命の」と訳している。

フランス語では普通に行われる品詞変換のパラフレーズを考えれば、石川訳の組み替えも可能ではあるが、フランス語で « révolutionnaire » は「革命の(形容詞) ➡ 革命家(名詞)」にも使う。「フランスの革命家の」と一段階一般化したほうが現代の政治意識までカバーし、抽象度としては適切になる。この文に続く « l'écriture marxiste » がその言い換えだからだ。これも「マルクス主義的」と訳すと、日本語では「マルクス主義に似ている (➡マルクス主義そのものではない)」という意味合いになる。フランス革命はマルクス主義によって起こされたわけではない。マルクスは歴史上の出来事であるフランス革命を考察することによってその思想を築いている。「connaître (知る)>connaissance (認識)」はフランス革命の結果を正当なものとして追認したマルクスの状況を極めて簡潔に示している。

« un droit sanglant » が「血腥い権利／血のしたたる権利／血にまみれた権利／血を流す権利」と訳されているが、「un droit de commander (命令を出す権利)」は « un autorité (権限) » の言い換えであり、明らかに「人を殺す権限」を意味する。

ici l'écriture est univoque, parce qu'elle est destinée à maintenir **la cohésion d'une Nature**;

ここでは文章は包括的である。なぜなら、それは<自然>の凝集力を維持することに充てられるからである。

ここではエクリチュールは、ひとつの自然の凝集力を維持するためのものだから一義的だ。

ここでは、エクリチュールは、ある<自然>の凝集性を維持することを目的としているので、一義的である。

「自然」の凝集力を維持することを目的としているので、エクリチュールは一義的となっている。

そこでは「自然な状態にある世界」の団結を維持することを目的としているため、エクリチュールは曖昧ではない。

« la cohésion d'une Nature » を「自然の凝集力」のように名詞のまま直訳しようとすると、具体性が強く、特殊な区別をしやすい日本語では誤解に誘導しやすい。文のレベルに展開すべきだろう。

c'est l'**identité lexicale** de cette écriture qui lui permet d'imposer une **stabilité** des explications et une

permanence de méthode;

この文章の語彙的な同一性こそが、解釈の安定性と方法の永続性を課することをその文章に可能ならしめるのだ。

こうした語彙の同一性が、安定した説明と永続きする方法とをこのエクリチュールに可能にしている。

このエクリチュールの用語的な独自性こそが、そのエクリチュールにたいして、諸解釈の安定性と方法の永続性を認めさせることを可能にするのである。

使用する語彙が同一であるゆえに、解釈の安定と方法の持続とを押しつけることができる。

このエクリチュールはすぐそれと分かる語彙を使っているため、説明が安定し、同じ方法をずっと使えるのだ。

直訳すると「語彙の同一性」となる「*l'identité lexicale*」(名詞+形容詞)を石川訳だけが品詞を入れ替え、「語彙が同一である」としている。パラフレーズとしてはそれでいいのだが、ただ「同一」としただけでは、まったく同じ言葉をキーワードのように繰り返し使っているだけという意味になってしまう。

「*identité*(同一性)」はここでは語源を共有する動詞「*identifier*(同定する)」の構図で捉えた方がいい。表面的には違う言葉を使っている、同じマルキストだと分かるという意味だろう。

名詞の「*stabilité*(安定性)」、「*permanence*(永続性)」も品詞をそのままに訳そうとすると、日本語ではこの「**・・性**」がそれほど積極的に使われないせいだろう、語義が歪みやすい。渡辺訳のような品詞を変える訳し方のほうが、候補にできる語彙も多く、言い換えが読んで理解しやすくなる。形容詞「*stable*」、動詞「*permanent*」に変換し、「安定した」、「ずっと使える」としておく。

ce n'est que tout au bout de son langage que le marxisme rejoint des comportements purement politiques.

マルクス主義が、純粋に政治的な行動に結びつくのは、その言語の果てにおいてでしかない。

マルクス主義が純粋に政治的な挙動とむすびつくのは、その言語の果てにおいてでしかない。

マルクス主義が純粋に政治的な挙動に合流するのは、その言語の果てにおいてでしかない。

マルクス主義がまったく政治的な態度をみせるのは、言語のもっとも先端の部分においてでしかない。

その言語を突き詰めると、フランス・マルキストの考え方は純粋に政治的な行動に結びつく。

「*c'est ~ que*」の強調構文が使われた上に、「*ne ~ que*(~以外ない➡だけ)」が使われている。後者の構文も起源としては「強調」だったが、シンプルな表現を使う周辺の言語と違い、フランス語ではその効果が感じられなくなるほど標準化し、馴染んでしまっている。これに使われた論理は英語、イタリア語、スペイン語でも使えなくないが、やはり「凝った／ひねった表現」になる。それがフランス語では初

級文法のごく初期の段階で教えられるものになっている。

このような**強調**を日本語で杓子定規に訳出すると、理解できないわけではないが、構文の論理が目立ちすぎる。パラフレーズを気軽に行うフランス語では構文による**強調**(当然主観的)の効果に重きを置かず、単に「変化(へんげ)」と見るようだ。

バルトがここで使う « marxisme » は「マルクス主義」ではあるが、「**L'écriture révolutionnaire française** » が « l'écriture marxiste » の言い換えとなっていたことを考えれば、「フランスの革命家のマルクス主義➡フランスのマルキストの考え方」のはずだ。「マルクスの考え」と「マルキストの考え」の違いは時に重大な問題になる。

Autant l'écriture révolutionnaire française est emphatique, autant l'écriture marxiste est litotique, puisque chaque mot n'est plus qu'une référence exigüe à l'ensemble des principes qui le soutient d'une façon inavouée.

フランスの革命的な文章が強勢法的であるのと同様に、マルクス主義的な文章は緩叙法的である。なぜなら、おのおのの単語は、もはや自認されてはいないやり方でそれを支える諸原則の総体への、狭小なる保証書にすぎないからである。

フランスの革命的エクリチュールが強勢法的(アソファック)であるのと同程度にマルクス主義的エクリチュールは緩叙法的(リトック)である。なぜなら、一語一語は、暗黙のうちにそれを支える原理の総体への狭苦しい照会にしかすぎなくなっているのだから。

フランスの革命的なエクリチュールが強勢的であるのと同様に、マルクス主義的なエクリチュールは緩叙的である。それというのも、それぞれの語は、もはや、自認されない仕方でそれを支える諸原則総体への狭溢な準拠でしかないからなのだ。

フランス革命的エクリチュールが誇張的であるのとおなじく、マルクス主義的エクリチュールは緩叙法的である。それぞれの語は主義主張の全体に窮屈に依拠するものにすぎないし、その主義主張はひそかにそれぞれの語を支えている。

フランスの革命家、マルキストのエクリチュールは大げさな言い方もするが、それと同じくらい故意に控え目に言いながら印象を強めたりもする。どの言葉も主義主張全体をごくわずかに指示するだけだし、その主義主張全体の方もその言葉を密やかに支えるだけだ。

« litotique(形容詞)<litotes(名詞) » は「**〔修〕緩叙法, 曲言法** **〔故意に控え目に言いながらかえって印象を強める修辞法で, 多く肯定の代わりに否定を用いて行われる。例: Il est intelligent. 『彼は頭がよい』という代わりに Il n'est pas bête. 『彼はばかじゃない』という]** **【ロワイヤル仏和中辞典】**」のように説明されるが、漢字を使った訳語「緩叙法, 曲言法」でどんなものか理解できる人はあまりいないだろう。パラフレーズするつもりで、文による説明を使えば、分かりやすくなる。フランス語の分かりにくさを日本語翻訳で再現しようとしても、さまざまな要因が絡んでさらに分かりにくく、あるいは間違った理解を生じさせやすい。「故意に控え目に言いながらかえって印象を強める」とするだけでいいだろう。

どの訳も « l'écriture révolutionnaire française » と « l'écriture marxiste » を別のものと見て、対比している。この二つの並置はすこし前にも出ていたが、そこでの訳し方はどれも別物とも、同じものの言い換えとも取れる日本語になっていた。日本語で特殊に区別する「フランスの革命的なエクリチュール／フランス革命のエクリチュール／フランスの革命のエクリチュール／フランスの革命家のエクリチュール」のどの場合もフランス語では同じ語彙の組み合わせにすることが可能で、品詞の使い分けは、日本語が特殊に区別するために使う品詞選択に対応するわけではない。結局フランス語の決定因子は「文脈」になる。最後のもののみ « marxiste (マルキスト) » と意味が同じになる。

Par exemple, le mot « impliquer », fréquent dans l'écriture **marxiste**, n'y a pas le sens **neutre** du dictionnaire; たとえば、マルクス主義的な文章のなかに頻出する「含む」という単語は、そこでは辞書にある中性的な意味を持っているのではない。

たとえば、マルクス主義的エクリチュールに頻繁に見られる《含む》という語は辞書に記されている中性的な意味をもってはいない。

たとえば、マルクス主義的エクリチュールのなかに頻出する《内含する》という語は、そこでは、辞書の中性的な意味を持っているのではない。

たとえば、マルクス主義的エクリチュールに頻出する「前提とする」という語は、辞書におけるような中立的な意味はもっておらず、

たとえば、(フランスの)マルキストのエクリチュールに頻出する「含意する」という語は、辞書にあるような中立的な意味はない。

日本語では「どちら(二つのうち)」と「どれ(三つ以上あるうち)」を区別して使うが、客観性を原則とするフランス語はそのような使い分けをしない。それと調和しているのだが、日本語では男-女、酸-アルカリなど、確立された二つの極の間を「中性」とし、確立されていない多数項の間であれば動詞「立つ」を用いて「中立」とし、動的・一時的・変化可能を含意する。

il fait toujours allusion à un **procès historique** précis, il est comme un signe algébrique qui représenterait toute une parenthèse de **postulats** antérieurs.

それは、常にある明確な歴史的経過への言及を行なっているのであり、先行する仮説の括弧全体を代表するような代数的記号のごときものなのである。

それはいつも、ある正確な歴史的経過を暗示しており、先行する仮説をまるごと括弧に入れて示す代数的記号のようなものなのである。

それは、つねに、ある明確な歴史的経過への暗示を行っているのであり、先行する諸前提の括弧入れの全体を表わすことになる代数的記号のようなものなのだ。

ひとつの明確な歴史的経過をつねに暗示している。代数記号が、それまでの公準をそっくり括弧に

入れて示しているようなものである。

何か歴史上の事実の明確な経緯をつねに暗示する。代数の記号が、それ以前に確立されている公理をそっくり括弧付きで示すのと同じように。

« *procès historique* » を直訳で「歴史的経緯」としやすいが、何の経緯かが示されていないと、日本語では欠落を感じる。「*histoire*」もただ「歴史」と訳して済ませやすいが、語義としては« *fait historique* (史実・歴史上の事実)» を指して使われもする。従って、この二語だけで「歴史的経緯」だけでなく、「歴史上の事実の経緯」までカバーする。「歴史的史実」では単なる形容詞ではなく、「特別な価値のある大きな事実」を意味することが多いため、使わない方がいい。

« *postulats* » は「公理・公準」と訳される。特殊なものが「公準」、一般性の高いものが「公理」ともともと使い分けられたが、現代では二つを区別しないで「公理」が使われるようだ。

Liée à une action, l'écriture marxiste est rapidement devenue, en fait, un langage de la valeur.

行動へと結びつけられることによって、マルクス主義的な文章は、事実上、急速に価値の言語となった。マルクス主義的エクリチュールは、行動にむすびつくことによって、事実急速に価値の言語になった。行動へと結びつけられることによって、マルクス主義的なエクリチュールは、はたして、急速に、価値の言語となった。

実際にマルクス主義的エクリチュールは、行動に結びつくことによってただちに価値観をしめす言葉になってしまった。

実際、マルキストのエクリチュールは、行動に結びつく、すぐさまその意味を持つ言葉となった。

冠詞のない « *de valeur* » は形容詞句として「意味・価値のある」と訳せる使い方がよくされる。ここでは限定のない「価値」ではなく、要点としている « *action* (行動)» を意味・価値とするという意味で定冠詞 « *la* » を付けたのだろう。ここでこの「限定」は重要な意味を持つ。

Ce caractère, visible déjà chez Marx, dont l'écriture reste pourtant en général explicative, a envahi complètement l'écriture stalinienne triomphante.

このような性格は、すでにマルクスにおいても見られはするものの、なお一般的には、彼の文章は説明的でありつづけたのであるが、それが、勝利を収めたスターリン主義の文章を完全に侵してしまった。マルクスのエクリチュールはがいして説明的だけれども、こうした性格はすでにかれにあっても見られはする。そして、それは勝ち誇るスターリン主義的エクリチュールを完全に浸蝕した。

このような性格は、すでにマルクスにおいても見られはするものの、それにもかかわらず彼のエクリチュールは、一般的には、説明的なものであり続けたのだが、この価値の言語という性格が、勝利を収めたスターリンのエクリチュールを完全に侵してしまった。

そのような特徴はすでにマルクス自身において顕著であり — とはいえ、彼のエクリチュールは概して説明的な次元にとどまっていたが —、そして勝利をおさめたスターリン的エクリチュールのなかに完全に浸透していった。

そのような特性はマルクスにおいてすでに見て取れるが(とはいえ、彼のエクリチュールは普通説明の次元にとどまっている)、闘争を勝ち抜いたスターリンのエクリチュールにはこれがあふれている。

« caractère » の訳語としては「特徴／特性／性質／風格／特色／個性／形質／特徴／標徴／性格／性質」など特殊化された語彙が並ぶ。つまり、このフランス語は一般性が高いということだ。三つの訳で使われた「性格」は擬人的と感じさせるだけで使えなくはないし、石川訳の「特徴」も静的と感じさせはするが、使用可能だ。しかし、ここではさまざまな現象を表す動詞と結び付けやすく、動的と感じさせる「特性」がいいように思う。

Certaines notions, **formellement identiques** et que le vocabulaire neutre ne désignerait pas deux fois, sont scindées par la valeur et chaque versant rejoint un nom différent :

形式的には同一で、中性的な語彙ならばそれを二度にわたって指示しないであろう若干の観念が、価値によって分割され、おのおのの斜面が異なった名前につながるのだ。

形式的に同一で、中性の用語なら二度とは指示しないだろうある観念が価値によって分割され、おのおのの斜面がちがった名称(ノ)にむすびつく。

形式的には一致していて、中性的な語彙ならば二度にわたって指示することがないような若干の観念が、価値によって分断され、それぞれの斜面が異なった名称につながるのである。

いくつかの概念は外見的には同一であり、中立的な語彙では二つの意味をしめすことができないので、価値によって区分され、それぞれの側に違った名称がつけられた。

見かけは同じものだが、中立的な語彙で両方を指すわけにはいかない概念がいくらかあり、それらはその(行動の)価値によって分けられ、それぞれの側面が別の名称を持つ。

三つの訳で「形式的に同一」と訳されている « **formellement identiques** » を石川訳は「外見的に同一」としている。具体的な「外」と「見」が使われたことで理解しやすくなっているが、副詞のまま訳さず、« **formellement**>forme (副詞>名詞) » と品詞変換したほうが日本語では自然になる。また、視覚性が強過ぎる漢語「外見」より、和語「見かけ」のほうが比喩として使いやすい。「見かけは同じ」としておく。

par exemple, « cosmopolitisme » est le nom négatif d' « internationalisme » (déjà chez Marx).

たとえば、「世界主義(コスモポリティズム)」は「国際主義(インターナショナリズム)」の否定的な名前なのである(すでにマルクスにおいて)。

たとえば、(これはすでにマルクスにあってもそうだが)《世界主義(コスモポリティズム)》は《国際主義(アンテルナショナリズム)》の否定的名称なのである。

たとえば、《世界主義》は《国際主義》の否定的な名称(すでにマルクスにおいて)なのだ。

たとえば「世界主義」とは、「国際主義」よりも否定的な価値をもつ名称である(すでにマルクスにおいてそうだった)。

たとえば、「世界主義」は、「国際主義」が指すもののネガティブな名称である(すでにマルクスにおいてそうになっている)。

この短い文は「簡潔」というより、メモ、走り書きのようだ。二つの用語は同じレベルにはない。「A est le nom de B」なのだから、前者は「名称(nom)」、後者はそれによって指し示される対象だ。これをハッキリさせるために動詞を使い、「～が指すもの」くらいの書き込みをしたほうがいい。

Dans l'univers stalinien, où la *définition*, c'est-à-dire la séparation du Bien et du Mal, occupe désormais tout le langage, il n'y a plus de mots sans valeur, et l'écriture a finalement pour fonction de faire l'économie d'un procès :

スターリン主義的宇宙においては、規定、すなわち<善>と<悪>の分離が、いまや言語全体を占めているのであって、そこには、もはや価値なき言葉はなく、文章は、結局、ある経過を節約することを機能とする。

スターリン主義的宇宙にあつては、定義づけ、すなわち善と悪との分離が言語全体において行われるようになり、価値のない語はなくなって、エクリチュールは結局、経過を節約することを機能とする。

スターリン流の宇宙においては、規定づけ、すなわち<善>と<悪>との分離が、いまや言語全体を占めているのであって、そこには、もはや価値なしの語は存在せず、エクリチュールは、結局のところ、ある経過を回避することを機能とする。

その後は、スターリン的な世界において定義すなわち善と悪の区分が言語全体を席捲するようになる。価値区分のない語は見られなくなり、ついにはエクリチュールが過程を節約する機能をもつようになる。

スターリンの時代(世界)になると、決めつけ、すなわちいい人間と悪い人間の峻別が言語全体を支配する。指すべき価値を持たない言葉はなくなり、ついにはエクリチュールが裁判の手続きを省略する機能を持つようになる。

« définition<définir(定義する／明確にする／決める)» を使っているが、スターリンは「善と悪」のような言葉の意味を定義、規定して多くの人々を粛正したわけではない。粛正するためにそれらの人々を「いい人間と悪い人間」と決めつけたと言っているだけだ。

「経過／過程」と訳されている « procès » はその「有罪の決めつけ➡処刑」が節約したもの、「裁判の手続き」を指す。

« stalinien » は日本語で区別する「スターリンの」と「スターリン的な(=スターリンのものに似ている)」のどちらにも使われる。ここではマルクスの後にスターリンが来るという歴史の段階を背景に論じている。「スターリンの世界／時代」で

なければ、論理がずれる。

il n'y a plus aucun sursis entre la **dénomination** et le **jugement**, et la clôture du langage est parfaite, puisque c'est finalement une valeur qui est donnée comme explication d'une autre valeur;

すなわち、いまや命名と判断のあいだには、いかなる猶予期間もなく、言語の垣根は完全なのである。なぜなら、ある価値の説明として与えられるのは、結局、もうひとつの価値なのだから。

命名と判断との間には何の猶予もなくなり、言語の囲いは完全となる。つまるところ、ひとつの価値が今ひとつの価値の説明として与えられるからである。

すなわち、いまや、命名と判断とのあいだには、いかなる猶予期間もなく、言語の閉域は完璧なのである。それというのも、ある価値の説明として持ち出されるのは、結局、別のひとつの価値であるからなのだ。

名称をつけることと価値判断をすることのあいだには時間的なずれがまったくなくなり、言葉の閉塞性は完璧なものとなる。結局は、ひとつの価値がべつの価値の説明として示されるのである。

容疑を掛けられてから判決が下されるまでの時間的なずれはまったくなくなり、言語への外からの介入は完全になくなる。言葉にどれだけの内容(価値)があるか、その説明として使われるのが結局言葉の内容(価値)だからだ。

« **dénomination** (命名／名前を付ける) » を使っているが、「**jugement** (判決／判断) » とペアになっていること、また前文の言い換えになっていることを考慮すると、これは「悪人」という言葉を人に貼り付けること、つまり「告発する／容疑を掛ける」ことを意味するのだろう。言語の外にある事実、証拠にまったく基づかず、告発の言葉が即証拠となって判決が下される状況をさまざまに言い換え、表そうとしている。

par exemple, on dira que tel criminel a déployé une activité nuisible aux intérêts de l'État;

たとえば、ある罪人が〈国家〉の利益に有害な活動を展開したというとする。

一例をあげると、しかじかの罪人は国家の利益を傷ける活動をしたといわれるが、

たとえば、ある罪人が国家の利益に有害な活動を展開したと述べるとする。

たとえば、ある犯罪者が国家の利益にとって有害な活動を展開した、と言ったとしよう。

たとえば、そんな犯罪者だから国益を損なうことをしでかしたのだと言うようなものだ。

これより二文後に書かれているように、この文はトートロジー(同語反復)なのだが、どの訳もそれが分かるような日本語になっていない。フランス語の項目の配列を追うと、「そんなことをやるような人間だから国益を損なうことをやった」となるが、これでは効果がぼやける。日本語では組み立て方を変えて、「国益を損なうことをやるような人間だからそんなことをやった」とすればハッキリする。

ce qui revient à dire qu'un criminel est celui qui commet un crime.

このことは、ある罪人が罪を犯した者であるということに帰着する。

これは罪人は罪を犯す者だというのにほかならない。
このことは、罪人が罪を犯す者であると述べることに帰着するのである。
それはつまり、犯罪者とは罪を犯す人だということなのである。
それは、犯罪者とは罪を犯す人間だと言うのと変わらない。

これはトートロジーの典型のようなものだが、日本語ではその効果を感じにくい。
「漢語:犯罪者→和語:罪を犯す人／人間」の変換は辞書だけでなく、日常生活でも
頻繁に行う言い換えの定形と見えるからだ。

On le voit, il s'agit d'une véritable **tautologie**, procédé constant de l'écriture stalinienne.

ごらんのとおり、これは、正真正銘の同語反覆であるが、それこそスターリン主義的な文章の変らざるやり方なのだ。

おわかりのようにこれこそ同語反覆であり、スターリン主義的エクリチュールにお定りのやり口である。

了解されるとおり、これは正真正銘の同義語反覆であるが、それこそがスターリン流のエクリチュールの恒常的な手法なのだ。

これは真の同語反覆であり、スターリン主義的エクリチュールの常套手段だとわかる。

お分かりと思うが、これはまさしくトートロジー(同語反覆)であり、スターリンのエクリチュールのいつもの手順だ。

« tautologie » の訳語「同語(同義語)反覆」は「同じ言葉(同じ意味の言葉)を繰り返す」と解釈され、「他の言葉や事実を使わなければ論理的に証明できないところを」という状況が忘れられてしまいやすい。分かりにくいはずだがカタカナの「トートロジー」が多用されるのはそのためだろう。

Celle-ci, en effet, ne vise plus à fonder **une explication marxiste** des faits, **ou une rationalité révolutionnaire** des actes, mais à donner le réel sous sa forme **jugée**, imposant une lecture immédiate des **condamnations** :

実際、スターリン主義的な文章は、もはや事実のマルクス主義的説明とか、行為の革命的合理性をねらうのではなくて、断罪を即座に読み取ることを課するところの判断されたかたちのもとに、現実的なものを差し出すことをねらうのである。

スターリン主義的エクリチュールは実際、事実についてのマルクス主義的説明とか行為の革命的合理性をうちたてるのではなくて、現実的なものを裁かれたかたちのもとに与え、ただちにそこから断罪を読みとらせることをねらっている。

実際、スターリン流のエクリチュールは、もはや諸事象のマルクス主義的な説明なり諸行為の革命的な合理性なりを根拠づけることを狙うのではなく、現実的なものを、その判断ずみの形のもとに持ち出して、さまざまな断罪の即座の読み取りを認めさせることを狙うのである。

実際のところ、このようなエクリチュールはもはや事実をマルクス主義的に説明しようとか行為の革命的な合理性を根拠づけようと目ざしているわけではなく、価値判断された表現形式のもとで現

実をしめして、ただちに糾弾を読みとらせようとしているだけである。

実際、このスターリンのエクリチュールはもはや事実をマルキストらしく説明する姿勢、つまり行動について革命家らしく合理的であろうという姿勢を確立しようとはしておらず、既に判決が下された形で現実を示し、糾弾しているのだということを読みとらせようとしている。

人名から作られた形容詞、「*stalinien*」、「*marxiste*」の翻訳に機械的に「～主義的／主義の／流の／・・・」を付けると、その人物本人のものが、追随者によって変質したものにズレたり、誤解を生じさせやすくなる。日本語はそのズレを特殊に区別するためにこのような付加語や助詞を使っている。一方、フランス語はどちらの場合も同じ語を用いるのだが、別にそれはこの言葉がどちらの意味も持っているというわけではない。どちらであるかは文脈で示そうとするだけの話だ。

石川訳のみ名詞「*une explication* (説明)」を動詞「*expliquer* (説明する)」に変換している。「*marxiste*」は「主義的な⇒的に」としてここでは間違いではないが、大仰と感じられる。「マルキストらしい(形)⇒らしく(副)」でいいだろう。これは「*une rationalité révolutionnaire*」と同格にしなければならないところだが、係り方がズレてしまっている。名詞「*une rationalité* (合理性)」⇒「*être rationnel* (合理的である)」とすればパラレルになる。「*révolutionnaire*」はどの訳も「革命的」としているが、先に触れたようにフランス語では名詞「*révolution* (革命)」から作られた形容詞「*révolutionnaire*」は「革命的(な)」だけでなく、「革命の」でも「革命の人⇒革命家」でも使う。ここでは「革命家の合理性」のような使い方なので、「革命家らしく合理的である／になる」くらいがいいだろう。

接続詞「*ou*」がどの訳でも「あるいは」と訳されているが、ここでは二つ別のものがあるわけではなく、一つの同じものの可能な言い方を並べた言い換えで、「つまり／すなわち」とするべき使い方だ。

バルトは単語レベルでも文レベルでも同じもの、同じことを何度も言い換える。どれか一つが的確で本質的と見えなくないが、そうではない。もしそんなものがあるれば、バルトはそれ一つしか使わなかつただろう。第一の表現を選んだ瞬間にはそれが「的確で本質的」と思えたが、その直後にそれとは別の表現が「適切で本質的」として思い浮かび、それが時に何度も繰り返す。しかし、どれも他の候補を打ち消す力はないという状況だ。結局、どれも単独では「適切で本質的」でなく、決定的な言葉は留保されたままになる。

「*jugée*」が「判断された／裁かれた／判断ずみの／価値判断された」と訳されている。このすこし前に出てきた「*la dénomination et le jugement*」を「命名する／名前を付ける⇒容疑をかける」と「判決」と解釈したが、ここでは「*condamnations* (断

罪)»とともに使われている。「容疑・嫌疑⇒裁判⇒判決」の手続きをすっ飛ばすスターリンの肅正を言語の問題として検討していることが理解できるような日本語訳にしなければならない。

le contenu objectif du mot « déviationniste » est d'ordre pénal.

たとえば、「偏向主義者」という言葉の客観的な内容は、刑罰の領域のものなのだ。

たとえば、《偏向主義者》という語の客観的な内容は刑罰の秩序のものなのである。

たとえば、《偏向主義者》という語の客観的な内容は、刑罰的な次元に属する。

だから「偏向分子」という言葉の事実上の内容は、刑罰の対象になるということである。

つまり、「偏向分子」だと指摘されれば処刑されるとだれもが理解する。

« contenu objectif » は三つの訳が「客観的な内容」、石川訳が「事実上の内容」としているが、この構文のままでは理解できない。この短い文は、かなり長い前文の« dénomination (命名 ⇒ 指摘) » から « condamnations (断罪 ⇒ 処刑) » までのショートカットを短く言い換えている。

« déviationniste (偏向分子) » はそもそも「主観的(subjective)な評価」でしかなく、本来検証、確認のプロセスが必要とされるのだが、スターリンがそう見なし、そう指摘された場合、だれもが同じように(⇒客観的 objectif)理解するもの(⇒内容 contenu)、それが« pénal (刑罰の) » だが、「処刑」以外の選択肢はないのだから、柔らかにぼかしただけだろう。

Si deux déviationnistes se réunissent, ils deviennent des « fractionnistes », ce qui ne correspond pas à une faute objectivement différente, mais à une aggravation de la pénalité.

もしも二人の「偏向主義者」が集まれば、彼等は「分派主義者」になる。このことは、客観的に異なった誤謬に対応するのではなくて、刑罰の加重に対応するのである。

偏向主義者が二人集ると《分派主義者》となるが、このことは客観的に異った誤りではなくて刑罰の加重を物語っている。

もしも二人の《偏向主義者》が集合すれば、彼らは《分派主義者》となるが、このことは、客観的に異なった過ちにではなくて、刑罰の加重に対応するのだ。

もし偏向分子がふたり集まったなら、彼らは「分派活動家」になり、実際には異なる違反行為をするわけではないが、より重い刑罰に相当することになる。

偏向分子が二人寄れば、彼らは「分派活動家」になり、誰が見ても一人の場合と異なる罪にはなっていないのだが、一人の場合より刑罰が重くなる。

« objectivement différente » は「客観的に／実際には異なる」と訳されているが、日本語でよく使われる「誰が見ても異なる」がちょうど当てはまる場合だ。

« une aggravation de la pénalité » は直訳では「刑罰の加重」だが、石川訳「より重い

刑罰」のように名詞を形容詞にパラフレーズしたほうが自然な構成で分かりやすい。
日本語では動詞 « correspond (対応する) » も呑み込んだ構文のほうが収まりがいい。

On peut **dénombrer** une écriture **proprement marxiste** (celle de Marx et de Lénine) et une écriture du stalinisme triomphant (celle des démocraties populaires);

正しい意味でマルクス主義的な文章(マルクスやレーニンの文章)と、勝利を収めたスターリン主義の文章(人民民主主義の文章)とを挙げることができる。

いわゆるマルクス主義的エクリチュール(マルクスとレーニンのそれ)と、勝ち誇ったスターリン主義的エクリチュール(人民民主主義のそれ)とを列挙することができるし、

本来的にマルクス主義的エクリチュール(マルクスやレーニンのエクリチュール)と勝利を収めたスターリン主義のエクリチュール(人民民主主義のエクリチュール)とを列挙することができるし、文字通りマルクス主義的(マルクスとレーニンの)エクリチュールと、勝利をおさめたスターリン主義の(人民民主主義の)エクリチュールとを列挙して示すことができる。

同じと見えるかもしれないが、厳密な意味でのマルクス主義の(マルクスとレーニンの)エクリチュールと、闘争を勝ち抜いたスターリン主義の(人民民主主義の)エクリチュールとは別物と言える。

バルトが考察しているのは大元にある「マルクスとレーニンの考え」と、強引な解釈によって変質し、現実の政治に使われた「マルクス主義」の違いだ。「**proprement marxiste**」を「正しい意味で／いわゆる／本来的に／文字通りマルクス主義的」では曖昧になる。日本語で「マルクス主義者」はマルクスを信奉する者を意味し、マルクスその人は含まれないが、フランス語の « marxiste » にはそのような区別がないため、翻訳では注意を要する。

仏和辞典で « dénombrer » の訳語には「数える、数え上げる、列挙する」ぐらいしかあげられていないため、結果として出てくる「数」に意味があると見えるが、フランス語の語義説明では « Faire le compte des unités composant un ensemble 【Larousse】 (一つの全体を構成する構成単位を数える) / Énoncer pour en avoir un compte exact les personnes ou les choses qui forment un ensemble. 【Wikitionnaire】 (一つの全体を構成する人、または物の正確な数を知るためにはっきり名を言う) / Faire le compte de; énoncer (chaque élément) en comptant. 【Petit Robert 1】 (数える; 数えながら構成素を一つずつその名を呼ぶ) » とあり、一緒くたにされているものが同じではないと認識し、それらを区別する行為を意味する。ここでは二つのエクリチュールが同じではなく、別物と言っているだけだ。

il y a certainement aussi **une écriture trotskiste** et une écriture tactique, qui est celle, par exemple, du communisme français (Substitution de « peuple », puis de « braves gens » à « classe ouvrière », ambiguïté volontaire des termes de « démocratie », « liberté », « paix », etc.).

また、たしかに、トロツキストの文章や、たとえばフランスの共産主義の文章のような戦術的な文章(「人民」、そして後に「民衆」による「労働階級」への代替、「民主主義」「自由」「平和」などという言葉の故意の曖昧さ)がある。

たしかにまたトロツキストのエクリチュールとか、たとえばフランスの Kommunismus の場合のような、戦術的エクリチュール(《人民》、ついで《庶民》という呼び名による《労働階級》という呼び名の置きかえや、《デモクラシイ》、《自由》、《平和》等々の術語の故意のあいまいさ)といったものがある。

また、たしかに、トロツキは主義的なエクリチュールとか、たとえばフランス共産主義のものである戦術的なエクリチュール(《人民》ついで《健全な民衆》の《労働者階級》に代えての使用、《民主主義》とか《自由》とか《平和》などという辞項の故意の両義性)とかが存在する。

もちろんトロツキ主義的なエクリチュールもあれば、たとえばフランス共産主義のような戦術的エクリチュールもある(「民衆」がつぎに「善良な人々」になり、そして「労働者階級」に代わることや、「民主主義」「自由」「平和」などの言葉をあえて曖昧にすることなどがそうである)。

もちろんトロツキストのエクリチュールもあれば、たとえばフランス共産主義のもののような戦術的エクリチュールもある(「民衆」という言葉、それから「善良な人々」を、「労働者階級」に言い換える。また、「民主主義」「自由」「平和」などの言葉を意図的に曖昧にする)。

トロツキその人とその信奉者であるトロツキ主義者のエクリチュールは合わせて « *une écriture trotskiste* » と言えるが、「トロツキ主義的(=トロツキ主義に似ている)」は区別しなければならない。

三つの訳が « *peuple* » と « *braves gens* » を置き換える前として訳しているのに対し、石川訳のみ、前者から後者に置き換えられ、それが次に « *classe ouvrière* » に置き換えられたと解釈している。

Il n'est pas douteux que chaque régime possède son écriture, dont l'histoire reste encore à faire.

おのおのの体制が自分の文章を有しているということに疑いはないが、そのような文章の歴史は、まだこれから書かれるべきものである。

おのおのの体制が自分のエクリチュールをもっていることは疑いないが、その歴史はまだ書かれないままである。

それぞれの体制が自分のエクリチュールを所有しているということに疑いはないが、そのようなエクリチュールの歴史は、まだこれから作成されるべきものである。

それぞれの政治体制が自分のエクリチュールをもっていることは疑いが無い。そしてエクリチュールの歴史はこれからはすべきこととして依然として残されている。

どの政治体制もそれぞれそのエクリチュールを持っていることは疑いようがない。それらのエクリチュールの歴史の研究はまだ手が付けられていないが、行われるべきだ。

L'écriture, étant la forme spectaculairement engagée de la parole, contient à la fois, par une ambiguïté précieuse, l'être et le paraître du pouvoir, ce qu'il est et ce qu'il voudrait qu'on le croie :

文章は、顕著に参加(アンガジェ)した語りの形式であって、貴重な両義性によって、権力の存在と外

観、すなわち権力の何たるかと、権力が何であると思われたがっているかとを、同時に含んでいる。エクリチュールは、見た眼にもはっきりと拘束されたコトバの形式でありながら気取ったあいまいきによって、権力の存在と見かけ、いいかえると権力の実体と、それがおもわれたい姿とを同時に含んでいる。

エクリチュールは、語りパロールの顕著にアンガジェした形式であって、貴重な両義の存在と外見とを、すなわち権力がそれであるものと権力がそれであると思われ望んでいるものとを、同時に含んでいる。

エクリチュールは、言葉が目に見えて社会参加した形式であるから、貴重な両義性によって、権力の存在と仮象とを一権力の現実のすがたと、そう見られたいと思うすがたとを—同時にふくんでいる。エクリチュールは、言葉が目に見える形で社会に関与している「かたち」であり、価値ある両義性により、権力のあり方とその見え方を、権力とはどんなものなのか、人々にどう信じさせようと思っているかを同時に合わせ持っている。

une histoire des écritures politiques constituerait donc la meilleure des phénoménologies sociales.

したがって、政治的な文章の歴史が書かれれば、それは、社会的な現象学の最良のものとなるであろう。

政治的エクリチュールの歴史はだから、最良の社会的現象学となるだろう。

そんなわけで、政治的なエクリチュールの歴史は、社会的な現象学の最良のものとなるであろう。

したがって政治的エクリチュールの歴史は社会現象学の最たるものとなるであろう。

したがって、政治的エクリチュールの歴史は、社会とは実際どのように動くものであるかを最もうまく映し出すだろう。

« la meilleure des phénoménologies sociales » を「社会的な現象学の最良のもの／最良の社会的現象学／社会的な現象学の最良のもの／社会現象学の最たるもの」とどの訳も品詞の構成を維持しようとしている。

フランス語は極めて簡潔だが、形容詞 « sociales » ➡ 名詞 « société (社会) », 名詞 « phénoménologies » ➡ 名詞 « phénomène (現象) » + 名詞 « -logies (学／研究) » ➡ 動詞「どのように動くか」 + 動詞「知る／明らかにする／教えてくれる」くらいに分解し、組み直したほうがいい。

Par exemple, la Restauration a élaboré une écriture de classe, grâce à quoi la répression était immédiatement donnée comme une condamnation surgie spontanément de la « Nature » classique :

たとえば、王政復古時代は、階級的な文章を練り上げたのであり、それのおかげで、弾圧はただちに古典的な「自然」からひとりでに現われ出る断罪として持ち出されていたのである。

たとえば、フランスの王政復古時代は階級的エクリチュールを練りあげ、そのおかげで断罪は古典(主義)的《自然》からの自然な帰結であるかのように、弾圧が即時に行えたのである。

たとえば、〈王政復古時代〉は、階級的なエクリチュールを練り上げたのであり、それのおかげで、弾圧は、古典主義的な《自然》からひとりでに出現する断罪として、即座に持ち出されていたのだ。

たとえば、「王政復古」は上流階級のエクリチュールを作りあげたので、そのことによって弾圧は

古典主義的な「自然」から自発的に生じた非難であるかのようにただちに示されたのだった。たとえば、「王政復古」は上流階級のエクリチュールを洗練させたのだが、そのおかげで古典期の「自然観」から糾弾する者たちが自然と現れ、ただちに弾圧された。

« **journalisme** » を「新聞主義」と訳す人はいない。だが、「**classicisme**」は思想、イデオロギーしか意味しないわけではないのに、安直に「古典主義」と訳されることが多い。しかも、名詞 « **classe** (上流階級) » + « **-ique** » → 形容詞 « **classique** (上流階級の) » → « **classique+ -isme** » の順序で生まれた言葉なのだが、「**-isme**」の付かない « **classique** » を「古典主義(的／の)」とした翻訳が多い。

「(上流階級の)質の高い文化」を指していた « **classique** » はいつまでも目標としてポジティブな評価を受けるわけではなく、歴史の中で「古くさい／ありきたりの」というネガティブな評価を受けることにもなり、単に「17世紀～19世紀」という時代しか示さない用例が語義として登録されている。客観的に「時代」しか示さない「古典期の」は、ロマン主義との絡みや体系化された主張を見ない場合に使われ、そもそも「思想／イデオロギー」と見なしにくかった音楽史、美術史では「古典主義」を駆逐してきているようだ。

les ouvriers **revendicatifs** étaient toujours des « **individus** », les briseurs de grève, des « ouvriers **tranquilles** », et la **servilité** des juges y devenait la « **vigilance** paternelle des **magistrats** » (de nos jours, c'est par un procédé analogue que le gaullisme appelle les communistes des « **séparatistes** »).

すなわち、要求される労働者は、常に「個人」であり、ストライキ破りであり、「穏健な労働者」であって、裁判官の奴隷根性は、そこでは、「司法官の親のような用心」となっていたのだ(こんにち、同じようなやり方によってド・ゴール派は共産主義者たちを「分離主義者」と呼んでいる)。

すなわち、労働者の姿はつねに《個人》であり、ストライキ破りであり、《穏健な労働者》であったし、望ましい裁判官の奴隷根性が、そこでは《司法官の父親的警戒》となっていた(今日、似たようなやり口でド・ゴール派はコミュニストを《分離主義者》と呼んでいる)。

すなわち、要求を掲げる労働者は、つねに《個人》とかストライキ破りとか《穏健な労働者》とかであって、裁判官たちの奴隷根性は、そこでは、《司法官の温情ある心遣い》となっていた(こんにち、類似の手法によって、ド・ゴール主義《分離主義者》と呼んでいる)わけである。

権利要求をする労働者はつねに「あいつら」であり、スト破りは「おだやかな労働者」であり、判事たちの卑屈さは「司法官の寛大な用心深さ」であった(今日でもよく似た手法でドゴール主義は共産主義者たちを「分離主義者」と呼ぶ)。

権利を要求する労働者はつねに「(集団をなしていない)個人」であり、スト破りは「落ち着いた労働者」、何でも労働者たちの言うことを聞く裁判官は「父親のように見守る行政官」となった(今日でも同じようにドゴール主義者は共産主義者を「分離主義者」と呼ぶ)。

形容詞 « **revendicatifs** » は「要求される／(訳なし)／要求を掲げる／権利要求をす

る」のようにどれも動詞を使って訳されている。日本語で動詞を使わなければ訳せない形容詞はひじょうに多い。そのような意味はフランス語も動詞を使って表せなくはないが、名詞に接続しやすい形容詞のほうが構文を組み立てやすくなっている。

同様に、「*tranquilles*」は「穏健な／穏やかな」と日本語でも形容詞にできるが、動詞「落ち着いた」が使われやすい。「*servilité* < *servile*」も「奴隷根性／卑屈さ」と訳されているが、「何でも言うことを聞く」のように動詞化しやすい。また、「*vigilance paternelle*」も「親のような用心／父親的用心／温情ある心遣い／寛大な用心深さ」という名詞型より動詞型の「父親のように見守る」のほうが日本語では馴染みやすい。

On voit qu'ici l'écriture fonctionne comme une bonne conscience et qu'elle a pour mission de faire coïncider frauduleusement l'origine du **fait** et son avatar le plus lointain, en donnant à **la justification de l'acte**, la caution de sa réalité.

ここでは、文章は、良心として機能しており、行為の正当化に、その現実の保証を与えることによって、事実の源と、その最も遠く隔たった転変とを詐欺的に一致させることを使命としているのが見られる。

ここでは、エクリチュールが良心のように機能しており、行為を現実性の保証によって正当化しながら、ことの起りと、そのもっとも遠いところへの変転とを詐欺的に一致させるのを使命としているのが見てとれる。

了解されるとおり、ここでは、エクリチュールは良心として機能しているのであって、行為の弁明にその現実の保証を持ち出すことによって、事象の始源とその最も遠く離れた転変とを詐欺的に合致させることを使命としているのだ。

エクリチュールが良心であるかのように機能しているのがわかる。行為を正当化するために現実の保証をあたえることによって、事実の本源とそれからもっとも遠いところにある変化とを作為的に合致させることを任務としているのがわかる。

エクリチュールがここでは良心のように働くことがわかる。その行為が過去にあったということで保証を与え、その行為を正当化することで、起源にある行為とその変わり果てた結果をひそかに合致させるという役目を負っているのだ。

この直前の文で形容詞、名詞を動詞化した訳し方をしたが、「*la justification de l'acte* (行為の正当化→行為を正当化する)」の「行為」はそれらを指している。その前に使われている名詞「*fait*」は一様に「事実」と訳されているが、これは英語の「*fact* (事実)」と同じではない。英語と違い、フランス語では動詞「*faire* (する／作る)」とともに使われているため、英語ではほとんど使わない「行為 (<する)>」の意味で使うことが少なくない。これは「*acte*」と同様、この前の文に例示された「行為」を指すと考えるべきだ。フランス語のこのようなパラフレーズは日本語では同じ言葉を繰り返さなければ特殊に使い分けていると誤解させる。

日本語では「行為の起源」と、これと順序が逆の「起源の行為」を区別するが、

フランス語では形容詞の内容を名詞化することで先行させることがよくある。「起源にある行為」でいいだろう。

Ce fait d'écriture est d'ailleurs propre à tous les régimes d'autorité; c'est ce qu'on pourrait appeler l'écriture policière :

ところで、文章のこのような事実は、あらゆる権力的な体制に固有のものであって、警察的文章と呼ぶこともできるであろう。

なお、こうしたエクリチュールの事実はあらゆる権威体制にはつきもの事実であって、それは警察的エクリチュールと呼ぶこともできるだろう。

しかも、エクリチュールに関するこのような事象は、すべての権威的な体制に固有のものであって、警察的なエクリチュールと呼ぶこともできるようなものである。

このようなエクリチュールの実態は、そもそもあらゆる権力体制に特有のものであるから、警察的エクリチュールと呼んでもいいだろう。

もっともエクリチュールをこのようにすることはどんな権力体制にも適している。謎解きのエクリチュールと呼んでいいだろう。

ここでは « fait » が「事実／事実／事象／実体」と訳され、動詞« faire(する／作る) »の意味を含んだものがない。「行為／やり方／作り」でいいだろう。

« policière » がどの訳でも「警察的」となっている。英語の « crime fiction(犯罪小説) » の下位ジャンルである « detective novel(探偵小説) » と一部重なりはするが、バルトに限らず、フランス語では「警察の ➡ 犯罪を捜査する ➡ 事件を推理する・謎解きをする」と意味を驚くほど拡張して使い、仏和辞典の訳語には一つか二つしか挙げられていないが、「roman policier」は「警官が出てくる警察小説」ではなく、探偵小説・推理小説・犯罪小説・スリラー小説・暗黒小説などさまざまなジャンルを包括する総称語(terme générique)となっている。警察など存在しない14世紀のイタリアが舞台のウンボルト・エコ作『薔薇の名前(Le nom de la rose)』もこれに含められる。「謎解き」が主軸だからだ。

on sait par exemple le contenu éternellement répressif du mot « **Ordre** ».

たとえば、「秩序」という言葉の永遠に弾圧的な内容は、周知のとおりである。

たとえば、「秩序」という語の永遠に弾圧的な内容は周知の通りである。

たとえば、「秩序」という語の永久に弾圧的な内容は周知のとおりなのだ。

たとえば「治安」という言葉が、いつの時代でも弾圧的な実体をもっていることはよく知られているのだから。

たとえば、ご存知のように「秩序」という言葉はいつの時代も抑圧的な意味を持っている。

« ordre » を石川訳のみ「秩序」ではなく、「治安」としているが、ここでは第一

義である前者が後者の意味を持ちうると考えるべきだ。日本語の「秩序」は動詞化せず、名詞にとどまるが、品詞変換をよく行うフランス語では「秩序(名)→秩序を作る(動)→命令する(動)→治安を維持する(動)→治安(名)」と意味が拡張する。「治める(動)」を含む「治安」を「秩序」という言葉で婉曲に表すような距離間がある。

L'expansion des faits politiques et sociaux dans le champ de conscience des Lettres a produit un type nouveau de **scripteur**, situé à **mi-chemin** entre le **militant** et l'écrivain, tirant du premier une image idéale de l'homme engagé, et du second l'idée que **l'œuvre écrite est un acte**.

政治的および経済的な事実の、〈文芸〉に関する意識の領域への拡張は、闘士と作家との途中に位置して、前者からは参加アンガジェした人間の理想的イメージを、後者からは書かれる作品が行為であるという思想を引き出すところの新しい型の教書執筆者を生み出した。

文芸の意識的領野への政治的・社会的事実の拡張は、闘士と作家との途中に位置した、進行記録係(スクリプトール)のようなあたらしいタイプを生み出した。かれは前者からは参加した人間の理想的イメージを、後者からは書かれた作品が行為であるという考えを引き出す。

政治的および社会的な事象の〈文芸〉という意識的な領野への膨張は、闘士と作家との途中に位置して、前者からはアンガジェした人間の理想的な像を、後者からは書かれた作品はひとつの行為であるという思想を引き出す新しい型の教書執筆者(スクリプトール)を生み出した。

政治的で社会的なことがら「文芸」の意識の領域に広がったことによって、新しいタイプの書き手が生み出されることになった。活動家と作家のあいだに位置し、活動家からは社会参加した人間の理想的なイメージを受けつぎ、作家からは書かれた作品こそが行為であるという考えを受けついでいる書き手が。

政治的、社会的な出来事、行動が「文芸」の意識の領域にまで広がると、新しいタイプの「書き手」が出てきた。戦う人間と作家の中間に位置し、戦う人間からは社会参加した人間の理想的なイメージを受けつぎ、作家からは作品を書くことは行動だという考えを受けついでいる。

日本語で「事実／出来事／行為」と特殊に区別するものをフランス語は動詞由来の « fait » ひとつで表す。ここでは動詞性を含む「自分以外の人が出た、あるいは自然に起きた出来事」「自分、あるいは誰かがした行為・行動」までで、「(行為・行動の結果かもしれないが)現にある事を意味する事実」は適切ではない。

「教書執筆者／進行記録係(スクリプトール)／教書執筆者(スクリプトール)」と訳された « scripteur » は « écrivain(作家・文人) » の抽象度を上げただけだ。石川訳の「書き手」が適切だ。

日本語で「途中」と訳されることが多いが、« mi-chemin » は「道の半分」が第一義だ。また「あいだ」では道の距離感がない。「中間」が適切だ。

« militant » は「闘士」より「戦う人間」のほうが抽象度が高く、ここでは適切だ。石川訳「活動家」では「戦う人間」と「作家・文人」の中間にある「新しい書き手」に重なってしまい、二極の一つとならない。

« l'œuvre écrite » は直訳では「書かれる作品／書かれた作品」になるが、「écrire l'œuvre (作品を書くこと)」としていいところを名詞構文にただけだろう。

En même temps que l'intellectuel se substitue à l'écrivain, naît dans les revues et les essais une écriture militante entièrement affranchie du style, et qui est comme **un langage professionnel de la « présence »**. 知識人が作家にとってかわると同時に、雑誌やエッセイのなかに、まったく文体から解放された職業的な「現場」の言語のような戦闘的な文章が生まれるのである。

知識人が作家にとってかわると同時に、雑誌やエッセイのなかに、完全に文体から解放され、また《現場(プレザンス)》の職業的言語といていい戦闘的なエクリチュールが生れている。

知識人が作家に取って代わると同時に、雑誌や論書のなかに、文体から完全に解放され、《現場》の職業的な言語のようなものになった闘士的なエクリチュールが生まれるのである。

知識人が作家に取って代わり、それと同時に雑誌やエッセイにおいてひとつのエクリチュールが誕生した。文体から完全に解放され、「現代への影響力」をみせる職業言語のような、闘うエクリチュールである。

知識人が作家に取って代わって書くようになると、雑誌やエッセイにひとつのエクリチュールが誕生した。文体の苦勞から完全に解放された戦闘的なエクリチュールであり、それは「存在している」ことだけをもっばら示す言語のようだ。

« un langage professionnel de la « présence » » が「職業的な『現場』の言語／《現場(プレザンス)》の職業的言語／『現代への影響力』をみせる職業言語／《現場》の職業的な言語／『現代への影響力』をみせる職業言語」と訳されているが、曖昧というより意味不明だ。「職業的⇒それだけを示す」と拡張的に使い、「存在していることだけをもっばら示す言語」くらいの意味だろう。

Dans cette écriture, les nuances foisonnent.

このような文章のなかにも、微妙な差異はいくらでもある。

この手のエクリチュールにもニュアンスは数多い。

このようなエクリチュールのなかにも、微妙な差異はたくさんある。

このエクリチュールにおいては、微妙な表現の相違がしばしばみられる。

このエクリチュールには、ささいな違いがさまざまに出てくる。

フランス語では一語だが、日本語で« nuances » はカタカナの「ニュアンス」でなければ、「微妙な違い」と訳されることが多い。しかし、これではその違いが正しく理解できるほうに寄る。このようなものが問題になるのは普通「うまく説明できない／正確に理解できない」場合であり、日本語ではそれを言葉にすることが多い。

フランス語は1語« foison (名:多量) > foisonner (動:富んでいる／増加する) » で表しているが、日本語では副詞になりやすい。

Personne ne nierait qu'il y a par exemple une écriture « Esprit » **ou** une écriture « Temps modernes ».

たとえば『エスプリ』の文章とか『タン・モデルヌ』の文章があるということを、誰も否定しないであろう。

たとえば、「エスプリ」のエクリチュールとか、「レ・タン・モデルヌ」のそれとかがあるのを誰も否定はしないだろう。

たとえば、『エスプリ』のエクリチュールとか『タン・モデルヌ』のエクリチュールがあるということを、誰も否定しないであろう。

たとえば『エスプリ』誌のエクリチュールや、『レ・タン・モデルヌ』誌のエクリチュールがあることは、だれも否定しないだろう。

たとえば『エスプリ』誌のエクリチュールと言っていいもの、『レ・タン・モデルヌ』誌のエクリチュールと言ってもいいものがあることは、だれも否定しないだろう。

接続詞 « ou » が「とか／や」と訳されている。これでは並べられた二つが別のものということになってしまう。この直後の文で « ces écritures intellectuelles (これらの知識人のエクリチュール) » と複数になってはいるが、ここで問題なのは異なることではなく、二つに共通の特徴だ。« ou » は同じものを指して「すなわち／言い換えれば」に相当する使い方をするが、ここでは「～と呼んでもいいし、～と呼んでもいい」くらいが適切だ。

Le caractère commun de ces écritures **intellectuelles**, c'est qu'ici le langage de lieu **privilegié** tend à devenir le signe suffisant de l'engagement.

これらの知識人的な文章に共通の性格は、ここでは、言語が、特権的な場所から、参加の十分な標示になる傾向を持っているということである。

これらの知識人的エクリチュールに共通した性格は、ここでは言語が特権的な場所から出て、拘束の十分なしるしになる傾向があるということだ。

これらの知識人的なエクリチュールに共通の性格は、ここでは、言語が、特権的な理由によって、アンガージュマンの十分な標章シーニュになる傾向を持つということである。

こうした知識人のエクリチュールに共通した特徴は、特権的な場からの言葉が社会参加をじゅうぶんに示す記号になる傾向があるということである。

こうした知識人らしいエクリチュールに共通する特徴なのだが、ここにある特別視される場の言葉は社会参加をじゅうぶんに示すようになる傾向がある。

形容詞 « intellectuelles » を三つの訳では「知識人的(な)」だが、石川訳では「知識人の」としている。

この章のタイトル « écritures politiques » に使われた形容詞 « politiques » は石川訳も含め、四つとも「政治的(な)」としているのだが、石川訳はここではどうして「的(な)」を採用しなかったのか。同義表現の間でただ揺れたわけではなく、真正の「知

識人」だけでなく、表層のみの「まがい物」など、そうでないものまで含みやすいこの「質的形容詞」の使われ方が「**のような／っぽい／みたい**」と同じように、本物ではないと、あるいは仮初めのものという評価を前提に、侮蔑的と受け取られやすいと感じたのではないだろうか。日本語と違いフランス語はこんな使い分けをしないが、ポジティブに真正のものを対象とする場合、日本語では「**らしい**」が使われる。

フランス語の名詞 « **enfant** (子供) » から派生した形容詞 « **enfantin** » は英語では « **childlike/childish/child's/for children** » と訳され、日本語でも「**子供の**」だけではなく、「**子供っぽい／子供らしい**」のようにネガティブにもポジティブにも訳されるのだが、この形容詞自体に色付けはなく、意味はニュートラルだ。

日本語の漢字遣いとしては、形容詞とも名詞とも判別できなくなるが、「知識人エクリチュール」のように何も付け加えず、ただ被せるだけで使える。一方、「**的**」は、明治時代になって、品詞区分のハッキリした英語の翻訳、特に « **-tic** » 語尾の形容詞の翻訳に、音の似た中国、宋・元の俗語の助辞「**的**」を使い始めたようだ。

現代中国語では日本語のこの用法を取り入れ、日本人が違和感を覚えるほど多用し、形容詞の標準形のようにになっているが、日本語では明治時代以前の伝統的な用法を駆逐するわけではなく、共存している。その結果、何も付加しないただの形容詞(用法)と常に比べられることになり、「**的**」を使う形容詞はその品詞性が強く表現される。基になる名詞の表すものに似ていると思っただけで、**主観的に**使いやすく、「**詩的な**絵画」「**音楽的な**色使い」のように、**比喩(直喩)**のようにまったくの別物に付けて使うことが多い。

石川訳が「**知識人的な**」ではなく、「**知識人の**」としたのは、おそらくそのズレを避けるためだろう。「**形容する**」という動詞は物の本質と言葉という表層のずれに対する日本人の感受性、言語を操作する意識を表しているのだろう。

『エスプリ』誌と『レ・タン・モデルヌ』誌は二つの別の雑誌だが、「**lieu privilégié** (特別視される場)」は単数になっている。「**ici**」を宙ぶらりんと感じたためか、石川訳は訳出していないが、これはバルトが二つの雑誌に共通のこの一つの「**場**」に焦点を当てていることを示している。

Rejoindre une parole close par la poussée de tous ceux qui ne la parlent pas, c'est afficher le mouvement même d'un choix, sinon soutenir ce choix;

その語りを語らないすべての人々の圧力によって閉ざされた語りへとつながること、それは、ある選択を支持することでないにしても、その選択の動きそのものを公然と示すことである。

ある閉ざされたコトバに、それを語らないすべての人たちの圧力によってむすびつくということ、

それはある選択を支持することではないにせよ、選択する動きそのものを公然と示すことである。それを語らないすべての人々の圧力によって閉じられたひとつの語り(パロール)に合流することは、ある選択を持ちこたえることではないにしても、その選択の動きそのものを公然と示すことなのだ。その言葉を口にしないあらゆる人からはねつけられて閉鎖的になった言葉を引き受けること。それは、ひとつの選択からなる運動そのものを標榜すること——その選択を支持するのではないにしても——である。

そんな話し方をしないすべての人々の圧力によって困りこまれている話し方を自分もしようとする
こと、それは、その選択を維持しなくとも、それを選ぶ動き自体を人に見せることになる。

エクリチュール(書くこと／書き方)について考察してきて、ここで« parole(話す言葉)/parler(話す)»を使っているが、それによって言語の一般原理を確認させられる。四つの訳では「語り・語る／コトバ・語る／語る・語りパロール／言葉・口に
する」としているが、これでは「書く／書き方」とバランスが取れない。「話す／話し方」がいいだろう。

l'écriture devient ici comme une signature que l'on met au bas d'une proclamation collective (qu'on n'a d'ailleurs pas rédigée soi-même).

文章は、ここでは、集団的な宣言(しかも自分自身で起草したのではない)の下にする署名のごときものとなる。

エクリチュールは(ここでは自分で起草したのではない)集団的な宣言の下に連ねる署名のようなものになる。

エクリチュールは、ここでは、集団的な宣言(しかも自分自身で起草したのではない)の下にする署名のようなものとなる。

エクリチュールはそこでは共同声明(そもそも自分で書いたのではないもの)の下にするサインのようになる。

そこではエクリチュールが、(自分が起草したものではない)共同声明の下に記したサインのようなものになっている。

Ainsi adopter une écriture - on pourrait dire encore mieux - assumer une écriture -, c'est faire l'économie de toutes les prémisses du choix, c'est manifester comme acquises les raisons de ce choix.

そんなわけで、ある文章を採用する——ある文章を引き受けるといった方がよいかも知れない——
ということは、選択のあらゆる前提を節約することであり、その選択の根拠を既得のものとして表示することである。

こうして、あるエクリチュールを採用する——よりの確に言えば——引き受けるということは、選択のあらゆる前提を節約すること、その選択の理由を既得のものとして示すことになる。

そんなわけで、あるエクリチュールを採用する——あるエクリチュールを引き受けると言う方がよいかも知れない——
ということは、選択のすべての前提を回避するということであり、その選択の根拠を既得のものとして明示することなのだ。

こうして、ひとつのエクリチュールを取り入れることは——よりよい言いかたをすれば引き受ける

ことは、選択にともなう前提のすべてを省略することであり、その選択の理由を疑いのないものとして表明することである。

したがって、引き受けると言ったほうがいいのだが、ひとつのエクリチュールを選び取ること、それは前提となる立ち位置の選択をすべて省略することであり、その選択の理由がちゃんとあると表明することなのだ。

Toute écriture intellectuelle est donc le premier des « sauts de l'intellect ».

したがって、あらゆる知識人的な文章は、「知性の跳躍」の第一歩なのだ。

したがって、あらゆる知識人的エクリチュールは《知性の跳躍》の第一歩である。

したがって、あらゆる知識人的なエクリチュールは、《知性の跳躍》の第一歩である。

したがって、知識人のエクリチュールはどれも「知性の一足飛び」の第一歩となる。

したがって、知識人らしいエクリチュールはどれも「知性の跳躍」のうち最高のものになる。

どの訳も「跳躍(一足飛び)の第一歩」としている。「複数回あるうちの最初の跳躍」なら分かるが、これでは三段跳び(ホップ・ステップ・ジャンプ)のホップなのかと考えさせる。しかし、それなら、これに続く二歩目、三歩目とは何かと考えてしまうが、そんなものにはまったく触れられない。

« premier » は時間的な順序の一番の意味で使うことが当然多いが、「評価の序列における一位⇒最高／最重要」でもよく使う。ここは内容の展開から見て、こちらだろう。自身にとって最初の書籍であるこの *Le degré zéro de l'écriture* の基になっているエッセーを『コンバ紙』に書き始めた際、自身のエクリチュールをこの言論の場に合わせて特殊に変えたことについての感慨が重ねられているのではないだろうか。

Au lieu qu'un langage idéalement libre ne pourrait jamais signaler **ma personne** et laisserait tout ignorer de **mon histoire** et de **ma liberté**, l'écriture à laquelle je me confie est déjà tout institution;

理想的に自由な文章、があるとすれば、それは、けっして私の人物を標示することができず、私の歴史や私の自由についてなにも知らないままに放置することになるだろうが、それに反して、私が依存する文章は、すでにまったくの制度である。

理想的に自由な言語は、けっしてわたしという人間をさし示すことはできないだろうし、わたしの歴史や自由について一切知らぬ顔であるだろう。ところが、わたしが委託されるエクリチュールというものはすでに制度にほかならない。

理想的に自由な言語というようなものは、けっして私の人物を標示することができず、私の歴史とか私の自由とかについてまったく無知なままに放置することになるであろうが、私が自分を託すエクリチュールは、すでに、まったくの制度なのだ。

理想的に自由な言語でも、けっしてわたし個人を表わすことはできないだろうし、わたしの歴史も自由もまったく知らせないままであるだろうというのに、わたしが身をゆだねるエクリチュールのほうはすでに制度そのものとなっている。

理想的に自由な言語を使っても、私の個人的な部分を示すことは決してできず、私がどんな生まれ

で、どう育ち、何をしてきたか、また私がどのように自由になったか、ひとにはまったく分からないままだろう。しかし、わたしが我が身を託すエクリチュールのほうはすでに(社会的に認知された)制度としてできあがっている。

« ma personne » が「私の人物／わたしという人間／わたし個人」と訳されているが、これでは他の人間ではなく「自分」ということが分かるだけで、焦点がそのどの深度、どの側面に当てられているかが分からない。

この名詞からは形容詞 « personnel(個人的な) » が作られており、これは「公的」と対照されるため意味が明確だ。日本語では「個人⇒個人的」という一方向のイメージしか持てないが、パラフレーズで品詞変換を極普通に行うフランス語は「personne(人間／個人)⇒ personnel(個人的な)⇒ personne(人間の個人的な部分)」という双方向性がある。文末に使われた« institution(制度) » は「公的／社会的」なもの典型だが、この一語でじゅうぶんこの解釈を成立させる。

« mon histoire » は「私の歴史」と訳すだけで済ませやすいが、フランス語と日本語では使い方、意味の広がりがかかなり違う。フランス語は一般性が高く、社会についても個人についても使われるが、日本語では「公(おおやけ)」のものにしか使わない。個人については「生まれ育ち(出自)／身の上／経歴／履歴／職歴／・・・」などひじょうに細かく特殊に区別する。そのため、「私の歴史」という日本語は使えなくはないが、比喩と感じる。「どんな生まれで、どう育ち、何をしてきたか」くらいがちょうど釣り合う。

« ma liberté » のほうも「私の自由」という日本語では抽象イメージに止まる。バルトの思考は抽象語彙を使っても、具体的な事象を示す。「人生」「公私」が背景に置かれているのだから、語源を同じくする動詞 « liberer(解放する) » が示す前後性、変化を含み、「自由⇒状況からの解放⇒どのように自由になったか」でいいだろう。

elle découvre mon passé et mon choix, elle me donne une histoire, elle affiche ma situation, elle m'engage sans que j'aie à le dire.

それは、私の過去や私の選択を露わにし、私にひとつの歴史を与え、私の立場を公然と示し、私があることを言う必要なしに、私を参加アンガジェさせるのである。

そのエクリチュールはわたしの過去と選択とをあらわにし、わたしにひとつの歴史を与え、わたしの立場を公然と示し、別にわたしが口にしないでもわたしを拘束する。

それは、私の過去や私の選択を露にし、私にひとつの歴史を与え、私の状況を公然と示し、私が述べるまでもなく、私をアンガジェさせるのである。

エクリチュールはわたしの過去と選択とをあばきだし、わたしにひとつの歴史をあたえて、わたしの状況を明示する。わたしに責任を負わせるのだがわたしにはそのことを言う必要がない。

エクリチュールは私がこれまで何をしてきて何を選択したのかを明るみに出す。つまり、私にひと

つの歴史／物語をくれるのだ。それは私の置かれた状況を公示するとも言える。要するに、私がそんなことを言わなくとも、私を社会参加させてくれるのだ。

同じ « elle » を主語とする短い文が四つ並んでいる。三つの訳は四つすべてを、石川訳は三つをこの順に直列の展開として繋いでいる。こうすると、日本語では因果の連鎖になる。しかし、そうであるなら、同じ主語 « elle » を繰り返したりはしない。これは並列の言い換えだ。どの文も言葉少なく、曖昧だが、並列として重ね合わせると、意味の不足を補い合っている。日本語では「つまり／とも言える／要するに」で繋ぐようなケースだ。バルトはこのような短い並列文を度々使う。絵画のクロッキー(コンテなどを用いてモデルを手早く描く)のようだ。

« mon passé et mon choix » を「私の過去と私の選択」と訳しただけでは何を意味するのか判然としないが、続く« une histoire(歴史／物語)» と « ma situation(私の状況)» をこれに重ねると、「わたしがこれまで何をして来てそれを選択するに至ったか」のような内容を指していると分かる。

La Forme devient ainsi plus que jamais un objet autonome, destiné à signifier une propriété collective et défendue, et cet objet a une valeur d'épargne, il fonctionne comme un signal économique grâce auquel le scripteur impose sans cesse sa conversion sans en retracer jamais l'histoire.

かくて、〈形式〉は、いまだかつてない程度に、防衛される集団的な財産を意味することに充てられる自律的な物体となる。そして、この物体は、儉約上の価値を持つ。それは、教書執筆者が、けっしてその歴史をたどりなおすことなしに、絶えず彼の回心を押しつけるのに役立つ節約的な標識として機能するのである。

形式はこうして、これまでになく、集団で守られる財産をさし示すことをめがけた自律的なオブジェとなる。そのオブジェは人に無駄使いをさせない価値をもち、節約の標識のように機能して、そのおかげで進行記録係はたえず自分の帰依を、またその歴史をあらためて描かずに強いることができるだろう。

このようにして、〈形式〉は、いまだかつてない程度に、防衛される集団的な財産を表意することを目的とする自律的な客体となる。そして、この客体は、儉約的な価値を持つ。それは、教書執筆者が、けっしてその歴史を描き直すことなしに、たえず自分の回心を認めさせるのに役立つ節約的な標識として機能するのである。

こうして「形式」はかつてないほど自立した対象となり、集団で守られる財産を意味するようになる。この対象は過程を節約する効力をもち、まるで節約の合図のように機能するので、書き手は自分の方向転換を、その経過をまったく物語ることなく、たえず認めさせることができる。

こうして「かたち」はこれまでにないほど自立／自律したものとなり、集団の、みんなが守る財産のようなものを意味するようになる。これには情報を節約させる力がある。つまり経済的なしるしとして働くのだ。そのおかげで、書き手はそれに至る経過をまったくたどらなくても、自分の転換、転向をつねに読者に理解させることができる。

« cet objet a une valeur d'épargne, il fonctionne » も先ほどと同様、無用に主語を繰り返した直列文と扱うべきではない。並列で、日本語では「つまり」を使うところだ。

« sa conversion » は日本語では特殊に区別する「転換／転向／改宗／回心」のどれをも意味するが、ここでは「政治」が文脈となっている。日本語訳には一つを選ばず、「転換(軽い)／転向(重い)」の二つを入れたほうがいい。

Cette duplicité des écritures intellectuelles d'aujourd'hui est accentuée par le fait qu'en dépit des efforts de l'époque, la Littérature n'a pu être entièrement liquidée :

こんにちの知識人的な文章のこのような欺瞞性は、時代の努力にもかかわらず、〈文学〉が完全に清算されることができなかったという事実によって際立たせられる。

今日の知識人的エクリチュールのこうした欺瞞性は、時代の努力にもかかわらず文学が完全には清算されえなかったという事実によってきわだたせられている。

こんにちの知識人的なエクリチュールのこのような欺瞞性は、時代の諸努力にもかかわらず、〈文学〉が完全に清算されることができなかったという事実によって際立たせられる。

今日の知識人エクリチュールにおけるこの二重性はさらに大きくなっている。時代の努力にもかかわらず、「文学」に完全に決着をつけることができなかったからである。

時代を通してさまざまに努力したにもかかわらず、「文学」を完全に清算することができなかったことによって、現在の知識人らしいエクリチュールのこの欺瞞はハッキリする。

« duplicité(欺瞞) » はネガティブなものだが、「accentuée」の訳に使われた日本語の「際立つ」はもっぱらポジティブな評価に使われるため、理解を混乱させる。そんな色付けのない「ハッキリさせられている(他動詞／受動) ➡ハッキリしている(自動詞)」ぐらいでいいだろう。

elle forme un horizon verbal toujours prestigieux.

〈文学〉は、依然として幻感的な言葉の地平線を形成しているのだ。

文学は相変わらず幻感的なコトバの地平線をかたちづくっているのだ。

〈文学〉は、依然として、言葉に関する威信のある地平を形成しているわけである。

文学はあいかわらず威厳ある言葉の地平を形づくっている。

「文学」はかわらず威厳のある言葉の地平となっている。

L'intellectuel n'est encore qu'un écrivain mal transformé, et à moins de se saborder et de devenir à jamais un militant qui n'écrit plus (certains l'ont fait, par définition oubliés), il ne peut que revenir à la fascination d'écritures antérieures, transmises à partir de la Littérature comme un instrument **intact et démodé**.

知識人はいまだ不十分に変貌した作家にすぎないのであって、自沈して永遠にもはや書かない闘士になるのでないかぎり(ある人々はそれを実行し、当然のことながら、忘れられた)、無傷で流行はずれの道具として〈文学〉から伝えられた前代の文章の魅惑へと戻ることしかできない。

知識人はなお変容しそこねた作家にすぎないし、自沈したり、もはや書かない闘士になりきる(ある

者はそうして、結局忘れ去られた)かしないかぎり、無きずで時代遅れの道具として、文学から伝えられた先行のエクリチュールの魅惑に戻るしかない。

知識人は、いまだ十分に変貌していない作家にすぎないのであって、廃業して、もはや書くことの永久にない闘士になる(ある人々はそれを実行し、当然のことながら、忘れられた)のでないかぎり、手つかずのままの流行遅れな道具として〈文学〉から伝達された前代のエクリチュールの魅惑へと戻ることしかできないのだ。

知識人はやはり首尾よく変身できなかつた作家にほかならない。作家活動をやめて、もはや書かなくなった活動家に永久になってしまうのでもないかぎり(何人かはそれをおこなって、当然ながら忘れられてしまった)、自分よりも以前のエクリチュールの——無垢で時代遅れの道具のように「文学」から伝達されるエクリチュールの——魅惑に立ちもどることしかできない。

知識人はまだ姿を変えそなつた作家にすぎない。そんな仕事をやめ、もう二度とペンを取らない闘士にならないかぎり(そうしたことで忘れられた者も当然ある程度いる)、無傷だが、時代遅れになった道具のような「文学」から伝わってきている過去の魅惑的なエクリチュールに立ち返るしか可能性がない。

« intact et démodé » が「無傷で流行はずれの／無きずで時代遅れの／手つかずのままの流行遅れな／無垢で時代遅れの」と、三つは単なる並列(順接)に、森本訳2は森本訳1でそうだったものを、接続詞 « et » を使わない二重形容詞の扱いに変えている。そうすることで、「～の～の」と単調になってしまうところを「～の～な」に変えたことは、二つの形容詞の係り方の微妙な違いに反応し、細やかに配慮したことを示している。

日本語では意味の対立する形容詞を「(ポジティブ)で(ネガティブ)」のように並列(順接)で繋ぐと、不自然とを感じる。しかし、フランス語に限らず西洋言語ではそのような場合にも等位接続詞が使われ、辞書にも「《対立・対比》しかし、それなのに【ロワイヤル仏和中辞典】」と用例に挙がる。

日本人がこの使い方を「不自然」と感じるのは、論理的に対立する内容を逆接で繋がなければ、「驚き」という自然な心の動きが表されないと見るからだろう。一方、フランス語がそうするという事は「自然な心の動きを消す→公式(冷静で客観的)」という効果が得られるためなのだろう。人間の主観への対し方の違いはこのような文法遣いにも出る。日本語では「無傷だが、時代遅れになった」とする。

Ces écritures intellectuelles sont donc instables, elles restent littéraires dans la mesure où elles **sont impuissantes et ne sont** politiques que par leur hantise de l'engagement.

つまり、このような知識人的な文章は、不安定なのであって、無力であり、参加(アンガージュマン)への強迫観念によってしか政治的ではないかぎりにおいて、文学的なものにとどまっているのである。これらの知識人的エクリチュールはだから不安定だし、無力で、拘束の強迫観念によってしか政治的でないかぎりにおいて依然として文学的なのである。

つまり、このような知識人的なエクリチュールは、不安定なのであって、無力であるかぎりにおいて文学的であり続け、アンガージュマンの強迫観念によってしか政治的ではないわけである。

したがって、これらの知識人エクリチュールは不安定である。無力であり、社会参加をすべきだという強迫観念によってしか政治的ではないので、文学的でありつづける。

したがって、知識人らしいこれらのエクリチュールは不安定だ。社会参加しなければという強迫観念によって政治的な態度をとっているだけで無力、そのことで文学的なままなのだ。

二つの文を切り離し、別の文とはしないのに、接続詞を使わず、ただ繋いでいるが、これは直列ではなく、**並列**だ。三つの訳のように順接とすると、日本語では因果性が出てしまう。

石川訳のように別の文にするほうがまだいい。しかし、ここでは « sont impuissantes et ne sont » の « et » も直列ではなく、並列だ。前に置かれた « impuissantes (無力) » は自立できるほどの内容がなく、後の内容から引き出せる結論的評価としか解釈できないため、日本語にする場合、前後を入れ替えなければ、自然と感じられない。

En bref, il s'agit encore d'écritures **éthiques**, où la conscience du scripteur (on n'ose plus dire de l'écrivain) trouve l'image rassurante d'un salut collectif.

要するに、これまた倫理的な文章なのであって、そこに、教書執筆者(あえて著作家ということではやできない)の意識が、集団的救済の安心できるイメージを見出すのだ。

要するに問題になるのはここでも倫理的エクリチュールであって、そこに、進行記録係(あえて作家とはもういわない)の意識は集団救済の安心できるイメージを見出すのだ。

要するに、これは、いまだに倫理的なエクリチュールなのであって、そこに、教書執筆者の(もはや、あえて著作家のということではできない)意識が、集団的な救済の安心させる模倣イメージを見出すのだ。

ようするに、問題となるのはやはり倫理的エクリチュールであって、そこに書き手(あえて作家と言うことはもはやできない)の意識は集団的な救済という安心できるイメージを見出すのである。

ようするに、まだ行動規範のエクリチュールが問題となっており、書き手(もう作家とは言わないことにしよう)の意識は集団的救済という安心できるイメージをそこに見出す。

« éthiques » の訳語として「倫理／倫理的」がもっぱら使われるが、この日本語は日本の文化、歴史のあり方からただ「普遍／不変／不滅」というイメージになっている。歴史の中で宗教、文化の摩擦や価値観の対立、革命を経験している西洋ではそこまで絶対的とは感じられないはずだ。相対的と感じられる抽象レベルに変えた方がいい。以前、「気構え・心構え」と訳したが、言い換え説明によく使われる「行動規範」くらいがいいだろう。

Mais de même que, dans l'état présent de l'Histoire, toute écriture politique ne peut que confirmer **un univers policier**, de même toute écriture intellectuelle ne peut qu'instituer une para-littérature, qui n'ose plus dire son nom.

けれども、〈歴史〉の現在の状態において、あらゆる政治的な文章は警察的な宇宙を固めざるをえないのと同様に、あらゆる知識人的な文章は、もはやあえて自分の名を名乗らないところの準＝文学を創設する。

しかし、歴史の現状においては政治的エクリチュールのすべてが警察的宇宙を確認するしかないと同様に、すべての知識人的エクリチュールは、あえて自称はしないけれども疑似文学を設定するしかない。

けれども、〈歴史〉の現在の状態において、あらゆる政治的なエクリチュールは警察的な宇宙を確認することしかできないのと同様に、あらゆる知識人的なエクリチュールは、もはやあえて自分の名前を告げない疑似文学を設定することしかできない。

しかし、「歴史」の現在での状況においては、いかなる政治的エクリチュールも警察的な世界を確認することしかできないし、同様にいかなる知識人エクリチュールももはや自分の名を言えなくなった疑似-文学を確立することしかできない。

しかし、「歴史」の現段階では、どんな政治的エクリチュールも監視される世界を追認することしかできないのと同様に、知識人のどんなエクリチュールも、もはやその名を言う気にもならない第二文学を生むことしかできない。

« un univers policier » が「警察的な宇宙／警察的宇宙／警察的な世界」と直訳になっているが、これではさまざまなイメージが湧き上がり、どこに焦点を置いているか分からない。日本語では「警察」が何をするか、動詞で書き込まなければ不足を感じる。このように形容詞一語で済ませている場合、一般的な定義に使われる機能（動詞）をそのまま形容詞で表しているだけだろう。この章の始めのほうに出た « une écriture policière (謎解きのエクリチュール) » と同じであれば、「謎解きの／謎のある ➡ 謎を解く ➡ 事実を暴く」くらいになるが、「治安を維持する／監視される」くらいでいい。

L'impasse de ces écritures est donc totale, elles ne peuvent renvoyer qu'à une complicité ou à une impuissance, c'est-à-dire, de toute manière, à une aliénation.

したがって、このような文章の行詰りは完全なものである。それは、共犯か、あるいは無力へ、すなわち、ともかく疎外へと至らしめることしかできないのである。

だから、こうしたエクリチュールの行詰りは完全であり、それらは共犯か無力、すなわち、ともかく疎外に導かれるしかないだろう。

そんなわけで、このようなエクリチュールの行詰まりは完全なものなのである。それらは、共犯なり無能力なりですなわち、いずれにせよ、ひとつの疎外へと差し向けることしかできないのだ。

したがって、これらのエクリチュールの袋小路は全面的なものである。エクリチュールがさししめすことができるのは、共謀か無力、すなわち、いずれにせよ結局は疎外でしかないのである。

したがって、これらのエクリチュールは完全に行き詰まっている。使いたくないものを使うか、そ

れとも何もできないでいるか、つまり、いずれにせよ自己を喪失せざるをえない。

別の文にしてもいい二つの文をただヴィルギュルで繋いでいる。ここに論理的展開があるわけではなく、一つの事実を二つの異なる書き方をしただけの並列文だ。前の文は構文上名詞 « *impasse* (行き詰まり) » が主語になっているが、実質的には後の文と同じ « *ces écritures* (これらのエクリチュール) » が主語だ。フランス語は動詞「行き詰まる」が内容の核になっていても、それを名詞化したほうが、論理構文を組みやすくなる。しかし、日本語では動詞内容を繋いだほうが分かりやすく、標準と言える。「これらのエクリチュール」を共通の主語として一文化していいだろう。

« *complicité – impuissance – aliénation* » の三つの名詞は「共犯(共謀) – 無力 – 疎外」が訳語の標準だが、文脈、全体の内容からそこに圧縮されている文レベルに近い内容を解釈しなければ、理解できる翻訳にならない。

エクリチュールの選択が基本にあるのだから、「共犯 ➡ 使いたくなかったものを使う」「無力 ➡ 何も使えない」「疎外(放棄/喪失) ➡ 自己を喪失する」くらいがいいだろう。(了)